

蕭兄弟の書簡文について

福井佳夫

目次

- 一、(兄) 早熟な十五歳
- 二、(兄) 文学と賢才
- 三、(兄) 哀悼の情
- 四、(弟) 大仰な表現
- 五、(弟) 攻撃性
- 六、(弟) 繊細な感覚
- 七、兄弟の文学的資質

## はじめに

梁の蕭統（あざなは徳施。昭明太子とも。五〇一〜五三一）と蕭綱（あざなは世纒。簡文帝とも。五〇三〜五五一）は、南朝梁の好文の兄弟として知られている。父はもちろん蕭衍こと梁武帝であり、母はその貴嬪だった丁令光である。この兄弟は現在では、政治史よりも文学史のほうで著名だといつてよからう。兄の蕭統は、詩文集『文選』の編者として声譽がたかく、弟の蕭綱のほうは、宮体詩の提唱者として名だかい。本稿は、この蕭兄弟の書簡文をとりあげ、その文学的な価値や意義を論じようとするものである。

兄弟の書簡文は、当時の文人のなかでは、おおく残存しているほうだろう。兄の蕭統は二十六篇、弟の蕭綱は五十篇が、それぞれ現在までのこっている。細目のジャンルをあげれば、兄は「令」が五篇、「啓」が十四篇、「書」が七篇であり、弟は「令」が五篇、「啓」が二十五篇、そして「書」が二十篇という内わけとなる（令はふつつ政治的文書に分類されるが、ここでは内容を重視して書簡文とみなした）。これらのなかには、量的に六、七句の断片から百句をこえるものまで、さらに内容的には、存問や哀悼、謝礼、文学論、仏教論など、多種多様なものがふくまれている。

梁末の混乱によって、膨大な書籍が灰塵に帰したなか、これだけの書簡が残存しているのは、幸運だったといわねばなるまい。兄弟は父の梁武帝（四六四〜五四九、在位五〇二〜五四九）の治世下、ともに皇太子としてすごしたので、その書簡文は臣下たちから「皇太子さまの親書」として珍重され、たいせつに保存されてきたのだらう。

かくおおくの書簡文がのこっているが、内容からみたととき、たとえば物品の賜与を謝する礼状（啓）や、仏教信仰に関連した書簡（啓や書）の類は、文学的立場からすると、あまり魅力があるものではない。前者の礼状は、形式的な美文がほとんどで、内容も類型的なものがおおいからだ。また後者の書簡は、兄弟の仏教信仰のありかたを研究するには有用であるうが、文学研究の資料にはなりにくいものである。

したがって、本稿がとりあげる書簡文は、それら以外のものが中心になるう。具体的には、兄弟がそれぞれの臣下や文学仲間と交流したり、文学的な意見を交換したりしたものである。たとえば、兄では「答晋安王書」「答湘東王求文集及詩苑英華書」「与殷芸令」「与晋安王綱令」「与何胤書」「与張纘書」など、弟のほうでは「与劉孝綽書」「答張纘謝示集書」「与蕭臨川書」「与湘東王書」「答徐摛書」「答湘東王書」「与劉孝儀令悼劉遵」「与湘東王令悼王規」「答新渝侯和詩書」などが、それにあたるう。これらの書簡、我われ文学の研究者にとって、もちろん興味ぶかい資料なのであるが、旧時の文人たちも有益な作品だとみなしたよつだ。というのは、明清以後に編纂された「六朝の名篇をあつめた」文学選集の類が、これらの書簡をしばしば採録しているからである。

たとえば明の王志堅『四六法海』は、蕭統の「答湘東王求文集及詩苑英華書」「与何胤書」、蕭綱の「答張纘謝示集書」「与蕭臨川書」「与劉孝儀令悼劉遵」「与湘東王令悼王規」「答新渝侯和詩書」「与湘東王書」などを採録している。また清の李兆洛『駢体文鈔』は、蕭統の「答湘東王求文集及詩苑英華書」「与何胤書」、蕭綱の「与湘東王令悼王規」「与劉孝儀令悼劉遵」「与湘東王書」「答徐摛書」「与蕭臨川書」などを採録している。おなじく許榘『六朝文繫』は、蕭綱の「与湘東王令悼王規」「与劉孝綽書」「答新渝侯和詩書」「与蕭臨川書」などを採録している。また彭兆孫『南北朝文鈔』は、蕭統の「答湘東王求文集及詩苑英華書」「与何胤書」、蕭綱の「与湘東王令悼王規」「与劉孝儀令悼劉遵」「与蕭臨川書」「答徐摛書」「答張纘謝示集書」「答新渝侯和詩書」「与湘東王書」

などを採録している。

これらの選集は、名文集として重視されるとともに、「実用的には」文章創作のお手本としても役だっていたはずだ。その意味で右のごとき兄弟の書簡は、後世もひろくよまれ、模倣されていたのだろう。そうした兄弟の書簡を考察して、文学的な価値や意義を説明してゆくのは、なかなか興味ぶかいことだといってよい。さらに、これらの書簡文を精細によりといてゆけば、当時の文人の精神生活や交流のありかたが推察できるだろうし、また兄と弟の気質や文学的資質の差異も、浮きぼりになってくるかもしれない。

なお、兄弟書簡の引用や読解、そして執筆年の推定等においては、兪紹初『昭明太子集校注』（中州古籍出版社 二〇〇一）や肖占鵬・董志広『梁簡文帝集校注』（南開大学出版社 二〇一五）、呉光興『蕭綱蕭繹年譜』（社会科学文献出版社 二〇〇六）などの書に依拠し、また許槌『六朝文繫』に採録されているものは、その注釈類も参照させていただいた。つつしんで御礼もつしあげる。

## 一、（兄）早熟な十五歳

まず兄の蕭統の書簡文からみてゆこう。

はじめに、わかいつきの書簡文をとりあげる。右にあげたなかでもっともはやい書簡は、天監十四年（五一五）、蕭統十五歳のときにかかれた「答晋安王書」である。ここの晋安王とは、同腹の弟だった蕭綱をさす。この作の全文をのべてみる。つぎのようなものである。

得五月二十八日疏并詩一首。省覽周環、慰同促膝。汝本有天才、加以愛好、無忘所能、日見其善。

首尾裁淨、可為佳作、吟玩反覆、欲罷不能。

「相如秦賦、曹劉異代、並号知音。」  
「發嘆凌雲、嘗謂過差、

「孔璋呈檄、興言愈病、未以信然。」

一見米章、而樹謏忘痲、方證昔談、非為妄作。

「炎涼始質、觀物興情、更向篇什。昔 梁王好士、遠致賓游、非唯藉甚當時、

「觸興自高、淮南礼賢、廣招英俊、故亦伝声不朽。」

「必能虚己、含毫属意、差有起予。撰養得宜、与时無爽耳。」

自来慕義、

「既責成有寄、居多暇日。殺核墳史、上下數千年間、無人致足樂也。」

「漁獵詞林、

「知少行遊、不動亦靜。不出戶庭、觸地丘壑。天遊不能隱、山林在目中。冷泉石鏡、一見何必勝於伝聞、

松塢杏林、知之恐有逾吾就。」

「靜然終日、披古為事、汎觀六籍、見孝友忠貞之跡、足以自慰、

「雜玩文史。觀治乱驕奢之事、足以自言。」

「人師益友、森然在目、拳而行之、念同乎此。」

「嘉言誠至、無俟旁求。」

「但清風朗月、思我友于。各事藩維、興言届此、夢寐增芳。善護風寒、指復立此、促遲還書。某疏、

「未克棠棣、以慰懸想、

五月二十八日づけの書簡と同封の詩一首をうけとった。何度もよみかえしていたら、おまえと膝をつきあわせているような、たのしい気分になったよ。おまえはもともと天賦の才があるつえ、詩がすきなんだな。自分の長所をわすれず、さらに日々進歩している。首尾ともにすっきりしていて、佳作だとおもつ。何度もよみかえし、なかなかストップできないほどだったよ。

むかし司馬相如が「大人賦」を奏上し、陳琳が檄の草案を呈示したが、それをよんだ武帝（劉徹）と曹操は時代こそちがうものの、ともに見巧者と称された。武帝は「まるで雲上にいるかのよう」と嘆声を発し、曹操は「頭痛がなかつた」と称賛したという。私は以前から、これらの話はちょっとおおげさで、信用しがたいとおもっていた。ところがおまえの書簡と詩をよむや、私も心配ごとをすっかりわすれてしまったんだ。おかげでむかしの「傑作はよむ者の心をいやすといふ」話も、でたらめでないとわかったよ。炎暑がすぎでずしくなつたせいも、時節に感じて興趣もたかまつてきた。秋の風物をまえにすると思いが嵩じてきて、詩心をかきたてられる。むかし漢の梁王は士をこのみ、淮南王は賢才を礼遇した。そしてはるか遠方の客をまねき、ひろく英俊の士をもとめた。おかげで両王の名声は当時はもちろん、後世でも不朽のものとなつた。両王は謙虚な態度をとれたので、遠方の客や英俊の士が義をたつて集結したんだな。そして彼らは筆をとつて思いをつづつて、主君の梁王や淮南王を啓発したのだった（私もそうありたいものだ）。ここに脱文ありか きちんと養生して、時候の変化にたがわぬ日々をおくろつとおもつ。父上の命によつて監撫の重責になつたことになつたが、まだひまな日々がおおい。だから古書をあじわつたり、詩文をあさつたりする日々をすこしてしている。数千年もの文学の堆積があるので、ここに脱文ありか まだ読者をたのしませるような作はみつかつていない。

おかげであまり外出せず、うごかなくても虚静になれることに気づいた。「読書していると」庭園に  
 でなくても、あちこちが山谷にみえてくるし、心を自在にすれば自然も姿をかくさず、山林が眼中にうか  
 んでくるんだよ。泉水や奇岩だつて、実見するのが伝聞よりいいとかぎらぬし、松林や杏樹だつて、本で  
 の知識のほつが跋渉するより、よく理解できるかもしれないぞ。

私は終日しずかに家居して、古書をひもとく日々だ。六籍をひもとき、文史の書にしたしんで、孝友  
 や忠貞の事跡をよんだり、治乱や驕奢の事例を観察したりしている。おかげで無聊もなぐさめられるし、  
 「自信をもって」発言できるようになった。「書物をよむと」よき師友が眼前にたくさんあらわれてくるし、  
 善言や至誠がよく頭にはいつてくる。つまり読書に専念していると、外出したり経験したりするのとおな  
 じ効果があるんだな。

清風がふきよせる明月のしたにいと、おまえたちのことがおもわれてならぬ。我われ兄弟はみな、  
 自分の藩国をおさめているので、じゅうぶん親近することもできぬ。かく思いをつづつてくれば、夢のな  
 かでもあいたい気もちがつつつてくるよ。寒さにあたらぬように気をつけて、私に心配させぬように。い  
 たいことは、以上だ。返事をまわっているよ。統敬白。

この「答晋安王書」、冒頭に「五月二十八日の疏並びに詩一首を得たり」とある。すると、この蕭統書簡は、  
 五月二十八日づけの弟（蕭綱）書簡への返書だとみなしてよからう。俞紹初『昭明太子集校注』五頁および七十  
 五頁によれば、蕭綱の来書は亡佚しているが、同封されていた「詩一首」は、おそらく現存する「応令詩」だろ  
 うという。つまりこれ以前に、兄の蕭統が自作の「示雲麾弟詩」（雲麾將軍の弟に示した詩）を提示して弟に和  
 するよう命じ、蕭綱が江州の地からこの「応令詩」をつくって応じた、ということだったようである。「このとき、

弟の蕭綱は十三歳。ということば、現在ふうにいえば蕭統は十五歳の中学三年生（皇太子として建康の東宮にいる）であり、蕭綱のほうは中学一年生（江州刺史となつて赴任したばかり）だったということになる。そうした若年というより、子どもというべき年ごろに、この兄弟は書簡をつづり、詩を応酬しているのである。参考までに、そのときの兩人の詩をかかげてみよう。

蕭統「示雲麾弟詩」

白雲飛兮江上阻　　白雲がとんできて江上にとどまり

北流分兮山風拳　　長江の流れは北に分流し山風が波濤をふきあげる

山万仞兮多高峰　　山は万仞で高峰がつらなり

流九派兮饒江渚　　大河は九つにわかれて江渚をつるおす

上岩嶢兮乃逼天　　上方は山が聳立して天にせまり

下微濛兮後興雨　　下方は濛々とし雨がふりだした

実覽歴兮此名地　　そなたはこうした絶景を歴覽し

故遨遊兮茲勝所　　景勝の地をへめぐつたはずだ

爾登陟兮一長望　　そして山にのぼつて遠望し

理化顧兮忽憶予　　政務のあいまにふと私を想起することだろつ

想玉顔兮在目中　　私もそなたの顔を眼中にうかべ

徒踟躕兮増延佇　　ゆきつとまりつ、また佇立するばかり

蕭綱「応令詩」

蠡浦急兮川路長

蠡浦は風波はげしく長江はながくつづく

白雲重兮出帝郷

白雲は眼前にかさなり京師からやってきたのだろうか

平原忽兮遠極目

平原はひろびろとし遠望しても

江甸阻兮羈心傷

江辺はみえず、旅びとの心は傷つくばかり

樹廬岳兮高且峻

廬岳のうえにたてば周辺はたかく急峻で

瞻派水兮去泱泱

長江の支流をみればゆったりたゆたう

遠煙生兮含山勢

遠煙がたちのぼって山をつつみ

風散花兮伝馨香

風が花をちらせて香りをただよわす

臨清波兮望石鏡

清波にのぞんで石鏡を望見し

瞻鶴嶺兮睇仙莊

鶴嶺をみて仙人の住処をみおろす

望邦畿兮千里曠

京畿のほうをみれば千里のかなた

悲遥夜兮九迴腸

長夜に悲嘆にくれ腸がねじれるほどだ

顧龍樓兮不可見

兄上の居室をのぞんでもみえるはずもなく

徒送目兮淚沾裳

一瞥しただけで涙は裳をうるおす

まず兄の詩は、弟が赴任した江州のようすを、はるかに想像して詠じたものである。「兮」字を使用した七言の詩にしたのは、蕭綱が江州に赴任したので、あえて楚辞ふうの句形を模したのだろう。この詩、後半四句で「おまえは私をおもいだし、私もおまえを気づかっている」という少年らしい感傷をのぞかせているが、自然描写と弟への思いとが渾然一体となった、秀逸な詩だといってよからう。

いっぽう弟の詩は、赴任まもない江州の光景を叙したもので、「前半〃自然描写、後半〃自分の述懐」の構成は、兄の詩を意識したものだろう。また二句目に「白雲」を使用したのも、兄の詩をつけたものとおもわれる。ただ、この詩も兄の詩とどうよつ、末尾の述懐部分が、いささか常套的な望郷ふう措辞になっている。それが、欠点といえば欠点だといえよう。

そうした欠点があつたとしても、この両詩、彼らの年齢をかんがえれば、たいしたものだといつてよい。当時の十五歳と十三歳を、現代の感覚で理解してはならないのかもしれないが、蕭兄弟がいかに早熟だったかが、この詩の応酬によつてうかがえるのである。

さて、蕭統の「答晋安王書」にもどろう。この書簡は、右のごとき詩の応酬をふまえてかかれたものである。ではこの書簡文の特徴は、どこにあるのだろうか。以下、気づいたことを指摘してゆこう。

第一に指摘したいのは、相手への称賛や励ましにみちていることだ。たとえば、

おまえはもともと天賦の才があるつえ、詩がすぎなんだな。自分の長所をわすれず、さらに日々進歩している。首尾ともにつきりしていて、佳作だとおもつ。何度もよみかえし、なかなかストップできないほどだつたよ。

むかし司馬相如が「大人賦」を奏上し、陳琳が檄の草案を呈示したが、それをよんだ武帝（劉徹）と曹操は時代こそちがうものの、ともに見巧者と称された。武帝は「まるで雲上にいるかのよつ」と嘆声を発し、曹操は「頭痛がなかつた」と称賛したという。私は以前から、これらの話はちよつとおおげさで、信用しがたいとおもっていた。ところがおまえの書簡と詩をよむや、私も心配ことをすっかりわすれてしまったんだ。おかげでむかしの「傑作はよむ者の心をいやすという」話も、でたらめでないとわかつたよ。

清風がふきよせる明月のしたにいと、おまえたちのことがおもわれてならぬ。我われ兄弟はみな、自分の藩国をおさめているので、じゅうぶん親近することもできぬ。かく思いをつづつてくれば、夢のなかでもあいたい気もちがつつつてくるよ。寒さにあたらぬように気をつけて、私に心配させぬように。

などが、それである。蕭統は弟たちには、きつといい兄貴だったのだから。の蕭綱の詩才をたたえたことばなどは、とくにそうした印象をあたえる。さらにでは、清風がふきよせる明月のした、蕭統は遠地にいる弟たちに思いをさせている。このあたり、恋人をおもつかのような纏綿とした情趣にあふれていて、ポエジーにもとんだ表現だ。いっぽうでは、漢武帝と曹操の典故（『史記』司馬相如伝と『魏志』陳琳伝）をふまえて、弟の詩文のすばらしさをたたえている。ここでの典故利用は文脈にぴったり適合しており、けつして無用の術学ではない。蕭綱も十三歳とはいえ博学だったので、これぐらいの典故は理解できたはずだ。そして、自分の詩文を相如賦作や陳琳檄文に比されて、うれしくおもったことだろう。

第二に指摘したいのは、文学（読書や詩文創作）への関心をかたっていることだ。たとえば、炎暑がすぎてすずしくなつたせいとか、時節に感じて興味もたかまってきた。秋の風物をまえにすると思いが高じてきて、詩心をかきたてられる。

「読書していると」庭園にでなくても、あちこちが山谷にみえてくるし、心を自在にすれば自然も姿をかくさず、山林が眼中につかんでくるんだよ。泉水や奇石だって、実見するのが伝聞よりいいとかぎらぬし、松林や杏樹だって、本での知識のほつが跋渉するより、よく理解できるかもしれないぞ。

私は終日しずかに家居して、古書をひもとく日々だ。六籍をひもとき、文史の書にしたしんで、孝友や忠貞の事跡をよんだり、治乱や驕奢の事例を観察したりしている。おかげで無聊もなぐさめられるし、「自信

をもって「発言できるようになった。「書物をよむと」よき師友が眼前にたくさんあらわれてくるし、善言や至誠がよく頭にはいつてくる。つまり読書に専念していると、外出したり経験したりするのとおなじ効果があるんだな。」

などが、それである。は詩文創作への意欲をかたっている。音楽の時期、文人たちが季節の変化に触発されて詩文をつくったことは、すでに『文心雕龍』物色篇などでも強調されていることだ。その意味で、この発言はそれほど珍奇なものではない（後述）。ただ私が注目したのは、わかき蕭統が、そうした文雅のありかたを認識し、すでに体得していたということである。これも蕭統の夙成ぶりをしめすものだろう。

いっぽうとでは、「私は終日しずかに家居して、古書をひもとく日々だ」といい、また「本での知識のほうに跋渉するより、よく理解できるかもしれないぞ」といつている。これは、外をあるきまわるより、室内で読書するほうがすきだ、ということだろう。地方にでた弟とちがって、山野を自由に跋渉できなかった長兄ゆえ、こうした性向になったのもやむをえまい。ただここで、蕭統が「孝友や忠貞の事跡をよんだり、治乱や驕奢の事例を観察したりしている」というのに注意しよう。これは、彼が為政者としての責務や治世への関心を、きちんと有していたことをしめしている。蕭統はけっして、文雅だけに熱中していたわけではなかったたのである。<sup>2)</sup>

第三に指摘したいのは、賢才との交流をこのんでいることである。右の「における司馬相如」「大人賦」と陳琳檄文の故事は、弟の文才をほめるための典故であった。ところがつぎの故事引用は、すこしちがっているようだ。

むかし漢の梁王は士をこのみ、淮南王は賢才を礼遇した。そしてはるか遠方の客をまねき、ひろく英俊の士をもとめた。おかげで両王の名声は当時はもちろん、後世でも不朽のものとなった。両王は謙虚な態度をとれたので、遠方の客や英俊の士が義をたつて集結したんだな。そして彼らは筆をとって思いをつづつて、

主人たる梁王や淮南王を啓発したのだった（私もそうありたいものだ）。

ここで蕭統は、漢の梁王が士をこのみ、淮南王が賢才を礼遇した故事をひいている。前者は梁王が司馬相如や鄒陽、枚乗らの賦家をめしだし、後者は淮南王が儒術や方術の士をまねいたことをいう。つまり漢代のふたりの諸侯王は、政治や軍略の輔佐役ではなく、ひろく文化面の才能を招致していたのだ。そうした故事をひくということは、蕭統が文化面の賢才（なかでも文学の士）をこのみ、その庇護者たらんとする志向があつたことをしめしている。こうした志向がのちに、みずからを魏の曹丕に擬することにつながっていったのだろう（後述）。

以上、十五歳のときの書簡「答晋安王書」について、その特徴を指摘してきた。相手への称賛や励ましにみちている、文学（読書や詩文創作）への関心をかたつてい、賢才との交流をこのんでいる——の三つだった。こうした特徴は、のちの書簡文や人生においても出現してくるものである。その意味で「答晋安王書」は、蕭統ののちの志向を予告したものと<sup>3)</sup>いってよからう。

なお、この「答晋安王書」の文章についてもふれておこう。まず語彙からみると、蕭統は「書簡中でもいうように」古今の書物を博覧していたようだ。書簡中の語彙の出処をしらべてみると、四書五経の類はもとより、文学系の書に由来することも多用している。曹丕「与呉質書」や「文賦」、文心雕龍にもとづく用語もつかっている。六朝の著名な文学論の類は熱心によりこんでいたのだろう。さらに「起予」や「友于」などの新奇な用語（断語）も使用しており、それなりの修辭的くふうもマスターしていたようだ（注1の注釈を参照）。

ただ、やはり十五歳というわかさのせい、未熟な箇所もないではない。たとえば、当時もつとも重要だった対偶の技巧をみると、不具合なものが散見している。まず量的にみると、この書簡文は全80句、対偶を構成する句は32句であり、対偶率は40%にすぎない。この数字は、たとえば修辭技巧が未発達だった魏の曹丕「典論論文」

とおなじ率であり、六朝美文としては低レベルのものだ。

さらに質の面でも、粗雑なものがおおい。たとえば「人師益友、森然在目、嘉言誠至、無俟旁求」の隔句対は、下句どうしの対応が不じゅうぶんだし、「各事藩維、未克棠棣」の対偶も、「各事」と「未克」はうまく対しているとはいえない。また「冷泉石鏡、一見何必勝於伝聞、松塢杏林、知之恐有逾吾就」四句は、おそらく隔句対にするつもりだったのだろうが、二句目と四句目の字数をちがえてしまって、対偶にしそくなっている。さらに「足以自慰、足以自言」は、文法的にはきちんとした対偶だが、句中で三字も重複していて、巧緻な対句とはいにくいものだ。

また、これ以外の内容や造句の面でも、粗さがめだっている。たとえば「撰養得宜、与时無爽耳」二句は、直前の句と意味的に連続しておらず、ここに布置される必然性がない。さらに「無人致足樂也」句にいたっては、前後との関連で見ると、まったく意味がとれない。これらはテキスト上で脱文があつたのだとおもわれるが（俞氏『校注』はそう解している）、しかし未熟さゆえの書きミスだった可能性もないではないだろう。

## 二、(兄) 文学と賢才

『答晋安王書』の内容をひきついだのが、蕭統二十二歳（普通三年、五二二）のときの『答湘東王求文集及詩苑英華書』だろう。十五歳時では舌足らずだった発言が、この書簡ではより明確にかたられている。その意味で、蕭統の人となりや文学観をうかがうには、この書簡がもっとも好都合だといってよからう。

この書簡は異腹の弟、湘東王こと蕭繹（のちの梁元帝。五〇八〜五五五）への書簡である。この年、蕭統は臣

下の劉孝綽に自分の文集（梁昭明太子集二十卷）を編集させ、また『詩苑英華』なる選集（『梁書』本伝に「五言詩の善き者を、文章英華二十卷と為す」とあるのが、それか）も編纂したようだ。このとき十五歳だった蕭繹は、その両書が完成したとの知らせを耳にし、手紙（佚）でそれをよみたいと兄にお願ひしたらしい。そうした依頼に対し、蕭繹はこの返書「答湘東王求文集及詩苑英華書」をつづつて、了解した旨や日ごろの所感をかきおくれたのだった。つぎのような内容である。<sup>4</sup>

得疏、知須詩苑英華及諸文製。發函伸紙、閱覽無輟。雖「事涉烏有、而清新卓爾、殊為佳作。」  
義異擬倫、

夫文「典則累野、能「麗而不浮、文質彬彬、有君子之致。吾嘗欲為之、但恨未逮耳。

麗亦傷浮。典而不野、

觀汝諸文、殊与意会。至於此書、弥見其美。遠兼邃古、学以聚益、居焉可賞。

傍暨典墳。

吾少好斯文、迄茲無倦。譚經之暇、陟龍樓而靜拱、与其飽食終日、寧遊思於文林。

断務之余、掩鶴閑而高臥。

或曰因春陽、其物韶麗。

樹花甃、春泉生、陶嘉月而嬉遊、或朱炎受謝、玉露夕流。

鶯鳴和、暄風至、藉芳草而眺矚、白臧紀時、金風多扇。

悟秋山之心、登高而遠託。或夏条可結、倦於邑而屬詞、密親離則手為心使、

冬雲千里、靚紛霏而興詠。昆弟宴則墨以親露。

又愛賢之情、与時而篤。

冀同市駿、不如子晋、而事似洛濱之遊、

庶匪畏龍。

多愧子桓、而興同漳川之賞。

漾舟玄圃、必集心阮之儔、

投覈仁義、

旨酒盈壘、

曜靈既隱、

繼之以朗月、

並命連篇、

在茲彌博。

徐輪博望、亦招龍淵之侶。

源本山川、

嘉肴溢俎、

高春既夕、

申之以清夜。

又往年因暇、搜採英華。

上下數十年間、

未易詳悉、

猶有遺恨、

而其書已伝。

雖未為精覈、集乃不工、

而並作多麗、

汝既須之、

皆遣送也。

某啓。

亦粗足諷覽。

お手紙拝領。

『詩苑英華』

と私の文集がほしいんだね、わかったよ。

文箱をあけておまえの手紙をとりだしてみると、よみだしてとまらなかつた。おまえの手紙「や同封の詩文」は主題は虚構をまじえ、内容は見当ちがいの比喻をつかっているが、それでも清新さとはびぬけていて、じつに佳作だとおもう。

いつたい、文学は典雅であれば粗野になりやすく、美麗であれば浮薄になりやすいものだ。美麗でありながら浮薄でなく、典雅でありながら粗野でなければ、文質彬彬として君子の気風をそなえたものになる。私はそんな詩文をつくりたいんだが、残念ながらうまくいかない。

ところがおまえの詩文をみると、びたり文質彬彬の風をそなえているじゃないか。今回のおまえの手紙の文などは、ことにすばらしい。古風な趣をそなえ、古籍をまなんでいるから、おかげで成果がよくできて、すこくすばらしい出来になっているよ。

私はわかいころから文学好きで、あきることがなかつた。講經のあいまや国務の余暇などは、龍楼に

いつて静穩にすこし、鶴閑にとじこもって悠々と文学にしたしんでいる。ひねもす飽食するよりは、詩文の林のなかをさまよっているのがすきなんだよ。

そして、陽春の光がふりそそぐころ、万物がきれいにかがやきだす。樹花はひらき、鶯の鳴き声もなごやかだ。春の泉はこんこんと湧出し、温風もふきよせる。すると、明月をめでて散策し、芳草のうえに横たわって周囲をながめる。また暑夏がおわりをつけ、秋の時候となるや、玉露が夜にむすび、秋風がふきはじめる。すると秋山の心をしり、高所にのぼっては心をとく託す。また夏の樹枝がむすべるほどのびるや、憂いごとにもあきて詩をつづり、冬の雲が千里にひろがるや、そのとぶさまをみて吟詠する。「そうした詩文によつて」兄弟がはなれているときは、おのが心情をつたえられるし、兄弟が宴席にいるときは、自分の気分をあらわすこともできるんだよ。

さらに私の賢才好みは、時とともにひどくなるいっぽつだ。「死馬をかって」駿馬を入手した「あの燕の昭王の」故事にあやかり、まちがっても「あの葉公のように」「真の賢才をこわがることがないように」したいもの。「そうした賢才との交流たるや」子晋（王子喬）にはおよばぬが、事からは子晋が洛濱であるんだ話に似ているし、子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水でたのしんだ故事（南皮のあそび）とおなじだよ。

舟を玄圃園につかべて、応場や阮瑀のごとき賢才をあつめ、車を博望苑にすませて、龍淵のごとき土をまねきよせる。そして、仁義を論じ、きれいな山水を「詩文をつくる」源泉とするのだ。美酒は樽にみち、馳走は台にあふれるなか、やがて日がしずんで明月があたり、夕方になってきよらかな夜をむかえる。すると私は賢才たちに詩文をつくるよう命じ、こうして「文集ができるほどの」たくさんの詩文ができた

んだよ。

また以前、閑暇をえたおり、すぐれた五言詩をあつめてみた（詩苑英華）。近々数十年の作でさえ、網羅できていない。まだ不満はあるんだが、世間にでまわってしまった。まだ完備したものではないが、まあなんとか読誦にはたえるかもしれない。今回の文集（昭明太子集）にいたれた私の作は出来はよくないが、唱和した「賢才たちの」詩にはいいものがおおいはずだ。おまえがほしがるので、ぜんぶおくることにするよ。統敬曰。

この「答湘東王求文集及詩苑英華書」の構成は、高歩瀛『南北朝文學要』の注解によると、と は蕭繹往信「および同封された詩文——福井」のすばらしさを称賛したものだ。と は自分の文学好きな性癖を叙して、文集ができるにいたった由来をかたつたもの。は『詩苑英華』の説明をし、また自分の文集について解説したもの——だという。たしかにそうかんがえれば、わかりやすい。

まずは、この書簡の文章をみてみよう。すると、十五歳時の「答晋安王書」にくらべると、対偶率が55%に向上していることに気づく。十五歳時の書簡文は対偶率40%にすぎず、粗雑な措辞も散見していた。だがこの書簡では、その種の不備はみられない。さらに典故は、各様の書物からとりだして多用しているが、うまく地の文にとけこんでいて、違和感を感じられない。全体に上乘の美的行文だといってよい。やはり、この七年間の勉強と経験とは、無駄ではなかつたのだらう。

つぎに内容をみてゆこう。この蕭繹への返書、さきにもた「答晋安王書」と似た発言が、より明確にかたられている。まず第一の「相手への称賛や励まし」については、たとえば、つぎのような箇所がそれに該当しよう。

文箱をあけておまえの手紙をとりだしてみると、よみだしてとまらなかつた。「おまえの手紙や同封の詩

文は「主題は虚構をまじえ、内容は見当ちがいの比喩をつかっているが、それでも清新さとはびぬけていて、じつに佳作だとおもつ。」

おまえの詩文をみると、びたり文質彬彬の風をそなえているじゃないか。今回のおまえの手紙の文などは、ことにすばらしい。古風な趣をそなえ、古籍をまなんでいるから、おかげで成果がよくできていて、すこくすばらしい出来になっているよ。

ここで蕭統は、「清新」や「文質彬彬」の語をもちいて、弟の詩文をほめたたえている。なかでも、「文質彬彬」(『論語』雍也に典拠をもつ)の語は、「修辞と内容とがほどよく調和している」という意味で、蕭統の理想的な文学境地をかたつたものである。この語は、「文選序」中の「沈思翰藻」とならんで有名になり、後世、蕭統や『文選』の文学観を説明するさい、かならず言及されるようになった。ただ、この書簡を精細によんでみると、この語は、「自分は文質彬彬の理想を体現できていないが、おまえ(蕭繹)の詩文はそれができている」というふうに使われている。つまりこの「文質彬彬」の語は、蕭繹の詩文を「好意的に」評するためにもちだしたのであり、その主眼は、おのが文学論の開陳ではなく、弟の詩文をたたえるほうにあったことに注意しよう。

このように蕭統は他人(肉親や臣下)をほめて、いい気もちにするのが、ひじょうにうまい。漫然と褒めことをならべるのではなく、ひとの美点を具体的に指摘してたたえている。いわば「ひとをみて法を説く」ならぬ、「ひとをみて褒辞をならべる」を実践しているわけだ。蕭統は『梁書』の本伝をよんでみると、だれに對しても同種の対応がとれたようであり、あたかも気がばり名人といったような観がある。それゆえ、右のやのような弟への称賛は、肉親ゆえの身びいきなのでなく、彼の「寛和にして衆を容れる」(『梁書』本伝)性分が、しからしめたものだったのだらう。

つづいて、第二の「文学への関心」については、「右の もそうだったのだが、それ以外に」つぎのような発言がみえている。

私はわかいころから文学好きで、あきることがなかった。講經のあいまや国務の余暇などは、龍楼にいて静穩にすこし、鶴閑にとじこもって悠々と文学にしたしんでいる。ひねもす飽食するよりは、詩文の林のなかをさまよっているのがすきなんだよ。そして、陽春の光がふりそそぐころ、万物がきれいにかがやきだす。……また夏の樹枝がむすべるほどのびるや、憂いことにもあきて詩をつづり、冬の雲が千里にひろがるや、そのとぶさまをみて吟詠する。

右の「私はわかいころから……さまよっているのがすきなんだよ」は、おのが読書好きの嗜好をかたつたものである。ここで蕭統が「私はわかいころから」というのは、二十二歳のいまは「わかい時期を脱して」中じきりの時期となった、という意識があつたからかもしれない。このとき蕭統は、自分の文集を劉孝綽に編纂させたばかりであり、それなりの達成感を感じていたので、こうしたことができたのだろう。

さらに「そして、陽春の光がふりそそぐころ」以後は、自然と創作との関係をかたつたものだ。この部分も有名で、研究者たちによく引用されるが、ただ自然によって詩心が刺激されるのは、蕭統だけではない。当時の文人のおおくが、同種の発言をしている。たとえば、陸機「文賦」が「四季の移ろいに応じて時の変化をいたみ、万物の盛衰をみてさまざまに想いをはせる。……かくして「詩囊がふくらんでくるや」、ひとは書物をなげすめて手に筆をとり、胸中の想いを文辞にのせようとすのだ」（遵四時以歎逝、瞻万物而思紛……慨投篇而援筆、聊宣之乎斯文）というのをはじめ、鍾嶸「詩品序」や弟の蕭綱「答張纘示集書」でも、同種のことを主張している。蕭統もそうした当時一般の考えかたをふまえて、自分もそうだと知っているのだろう。

つづいては、第三の「賢才との交流」。この書簡では、この特徴がとくに重要だといってよい。これについては、蕭統は書簡後半で、

さらに私の賢才好みは、時とともにひどくなるいっぽうだ。「死馬をかって」駿馬を入手した「あの燕の昭王の」故事にあやかり、まちがっても「あの葉公のように」「真の賢才をこわがることがないようにしたいもの。」「そつした賢才との交流たるや」「子晋（王子喬）にはおよばぬが、事からは子晋が洛浜であそんだ話に似ているし、子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水でたのしんだ故事（南皮のあそび）とおなじだよ。舟を玄圃園につかべて、応場や阮瑀のごとき賢才をあつめ、車を博望苑にすませて、龍淵のごとき土をまねきよせる。

とのべている。

この賢才好みをかたった部分で注意したいのは、蕭統が引用した故事である。さきの「答晋安王書」では漢の梁王や淮南王の故事をひいていたが、この書簡では、「隗よりはじめよ」で名だかい燕の昭王、そして龍好きだったが、本物の龍をみてにげだした楚の葉公しよほう、またたくみに吹笙し、伊洛の地にあそんだ周靈王の太子の子晋、そして南皮で臣下と詩を唱和した魏の太子の曹丕——の四人を引きあいだにしている（くわしくは注4を参照）。燕昭王は賢才好きの王の例、葉公は偽賢才好きの公の例としての引用だが、子晋と曹丕のほうは、風雅なあそびをこのんだ太子（ただし曹丕は厳密に言えば、後漢王朝下の魏王国の太子）の例として、「ここにひいたのだから」。このなかで重要なのは、最後の曹丕である。この曹丕という人物、いろんな属性を有しているのだが、蕭統はここでは、賢才らと南皮にあそぶ好文ぶりをとりあげている。「子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水でたのしんだ故事（南皮のあそび）とおなじだよ」がそれだ。これこそが蕭統の脳裏にあった、「賢才と

の交流」だったのだろう。つまり自身も好文の太子だった蕭統は、賢才らと文雅の世界にあそぶ曹丕像に、おのが理想をみいだしたのである。この曹丕への比擬はひじょうに重要であり、独立させて蕭統書簡の第四の特徴としてよからう。

この蕭統の曹丕比擬には、前史というべきものがある。それは、

太宗幼而敏睿、識悟過人。六歳便属文、高祖驚其早就、弗之信也。乃於御前面試、辞采甚美。高祖歎曰、「此子吾家之東阿」。

太宗（蕭綱）は幼児から俊敏で、その明敏ぶりは他を圧していた。六歳で文をつづったが、高祖（武帝）はその早熟ぶりにおどろき、信じなかった。そこで御前でためしたところ、太宗の辞采はたいそうすぐれていた。高祖は「この子はわが蕭家の東阿（曹植）だなあ」と嘆じたのだった。

という話柄がそれだ（『梁書』卷四簡文帝本紀）。この話で、父武帝（蕭衍）が、当時六歳だった蕭綱を曹植になぞらえたのは、それ以前から、兄の蕭統（綱が六歳だとすれば、このとき統は八歳）を曹丕に比擬していたからだろう。とすれば梁室では、この才すぐれし兄弟を、幼時から「蕭統＝曹丕、蕭綱＝曹植」とみなしていたのであるまいか。そうしたこともあって成人後の蕭統は、曹丕を意識するようになったのだとおもわれる。

ただ、ここの蕭統の意識をこまかく分析すれば、当初から曹丕への思慕があったのではあるまい。「賢才とともに文雅をたのしみたい」という願望がさきになり、それにふさわしい先達として、好文の太子だった曹丕をみいだした、という順序だったろう。これを要するに、蕭統はひろく賢才をこのんでいたのだが、彼の文学好きという志向から、とくに文学の士との交流がさかんにおこなわれたのだとおもわれる。

三、(兄) 哀悼の情

さて、ここまで蕭統書簡の特徴として、相手への称賛や励まし、文学への関心、賢才との交流、そして曹丕への比擬という四つをあげてきた。この四つの特徴が合流したのが、亡き賢才、つまりすぐれた臣下の死を哀悼した書簡だといってよからう。蕭統は、しばしば臣下の死をいたんだ書簡をつづつたが、その臣下はおおく文学の士であった。そのため彼の哀悼書簡では、しばしば文学の士との交流を想起し、その人格や文才のすばらしさを称賛している。私見によれば、この哀悼書簡にこそ、蕭統文学の美質がよくあらわれているといつてよい。その代表的な書簡が、つぎにしめす「与晋安王綱令」である。

大通元年(五二七)、蕭統二十七歳のとき、これまで親近してきた臣下たちが、つぎつぎ逝去するという不幸にみまわれた。そこで彼は弟の蕭綱に、彼らの死を哀悼する書簡「与晋安王綱令」をおくつたのだつた。それは、つぎのような文面である。

明北兗到長史遂相係凋落。傷怛悲惋、不能已已。去歲陸太常殂歿、今茲一賢長謝。

陸生「資忠履貞、文該四始、高情勝氣、貞然直上。明公儒学稽古、淳厚篤誠、立身行道、始終如一。

冰清玉潔、学遍九流。

儻值夫子、必升孔堂。到子「風神開爽、当官莅事、介然無私。皆「海内之俊乂、此之嗟惜、更復何論。

文義可觀、

東序之秘宝。

但遊処周旋、並淹歲序、造膝忠規、豈可勝説。幸免祇悔、実二三子之力也。

「談対如昨、零落相仍、皆成異物。每一念至、何時可言。天下之宝、理当惻愴。音言在耳。」

近張新安又致故。其人文筆弘雅、亦足嗟惜。隨弟府朝、東西日久、尤当傷懷也。比人物零落、特可傷惋。属有今信、乃復及之。

北兗州太守の明山實どのと長史の到洽どのが、あいついで逝去された。私は悲嘆にくれるばかりで、痛惜の念がおさまらぬ。昨年は太常の陸倕どのが物故されたが、このたび明と到のおふたりまで逝かれたのだ。

陸倕どのは忠貞の道を実践し、氷や玉のような廉潔さを有していた。詩文は風雅頌の正道を体し、学問は諸子を兼修していた。その高潔にして卓越した精神は、真率そのものだった。また明山實どのは儒学や古典をきわめ、淳良にして誠実、修養をかさね正道を実践する姿勢は、生涯かわることがなかった。もし孔子さまとお会いしても、きつとその堂に案内されたことだろう。いっばう到洽どのは、風格じつに闊達で、詩文もみるべきものがあつた。官人として職務にあたっては、まったく公平無私をつらぬいた。この三人のおかたは、天下の俊才にして、国子学の宝だった。でも彼らの死を哀惜したとて、いまさらどうにもならぬ。

ただ、私は彼らとともに、あちこち行楽して交遊し、ながく歳月をともししてきた。彼らが膝をまじえるように親身に忠告してくれたことは、かぞえきれないほどだ。私がここまで後悔せずによつてこれたのは、これら諸士のおかげだった。

私が彼らと議論したのは、ついこのあいだのようだし、そのことはもまだ耳にのこっている。それなの

に、あいついで逝去し、みな幽鬼となつてしまった。こんなことを想起するたびに、いつになったら「おまえとあつて」この悲しみをうつたえられるのかとおもふ。彼らは天下の宝だったので、かく哀惜するものとうぜんのことだろう。

ちかごろ新安太守の張率どのも、またこの世をさつた。あのかたは詩文がうるわしかった。おしいことをしたものだ。張どのはおまえ（蕭綱）の幕僚となつて、「おまえとともに」ながく任地をあちこち移動した。とくに気の毒でならぬ。

このように、ちかごろ私のゆかりの方々がつきつきと逝つてしまい、つらくていたたまれない。たまたま手紙をだす便があつたので、このことに言及してみたいのである。

この書簡では、賢才たる四人の賢才の死をいたんでいる。それは、八十五歳で逝去した明山實（四四三生）、五十一歳の到洽（四七七生）、五十七歳の陸倕（四七〇生）、そして五十三歳の張率（四七五生）の四人である。どの人物に対しても、はじめにその人となりを叙し、ついで哀悼のことはをのべるという順になっている。

まず四人の人となりを叙した部分をしめすと、陸倕に対しては、「忠貞の道を実践し、氷や玉のような廉潔さを有していた。詩文は風雅頌の正道を体し、学問は諸子を兼修していた。その高潔にして卓越した精神は、真率そのものだった」とのべ、明山實には「儒学や古典をきわめ、淳良にして誠実、修養をかさね正道を実践する姿勢は、生涯かわることがなかった。もし孔子さまとお会いしても、きつとその堂に案内されたことだろう」とかたる。そして到洽には、「風格じつに闊達で、詩文もみるべきものがあつた。官人として職務にあつては、まったく公平無私をつらぬいた」とのべ、張率には「あのかたは詩文がうるわしかった」と叙している。いずれも各人の個性に応じた、簡潔な称賛ふう一筆書きだといえよう。

つづいて蕭統は、この四人の思い出をかたつてゆく。「ただ、私は彼らとともに、あちこち行楽して交遊し」云々がそれだ。この部分では曹丕書簡からの字句を多用し、若年時からの曹丕思慕がいよいよ明瞭になっている。たとえば「私は彼らとともに、あちこち行楽して交遊し、ながく歳月をともしてきた」(原文「但遊処周旋、並淹歳序」)の箇所では、蕭統はおそらく、曹丕「与呉質書」のつぎのような場面を意識していただろう。

昔日遊処、行則連輿、止則接席、何曾須臾相失。

むかし貴兄らと行楽にでかけたおりは、すすめば車をつらね、とまれば席をならべ、しばらくもはなれたことがありませんでした。

この部分、字句だけみると、「遊処」が一致するにすぎない。これだけなら、それほどの影響関係はないといえよう。だが影響関係というものは、字句類似の多寡だけで判断すべきではない。ときの太子が、臣下と友人のように文雅をたのしみ、そしてその死を切実になしむことは、従前は「曹丕以外に」なかったことなのだ。その意味で、そつした臣下への親密な姿勢は、やはり曹丕からの影響だとせねばならない。

つづく逝去をいたんだ場面では、曹丕からの影響がより明確だ。すなわち、「あいついで逝去し、みな幽鬼となつてしまった。こんなことを想起するたびに、いつになったら「おまえとあつて」この悲しみをうつたえられるのかとおもつ」(原文「零落相仍、皆成異物。每一念至、何時可言」)の部分は、おそらく曹丕「与朝歌令呉質書」のつぎのような場面を想起していただろう。

元瑜長逝、化為異物。每一念至、何時可言。

阮瑜は逝去し、幽鬼となつてしまいました。この思いを想起するたびに、いつの日に「貴殿と悲しみ」をかたりあえるのかとおもつのです。

このように、蕭統はおのれを曹丕にかさねながら、臣下の死をいたんでいる。五年まえの「答湘東王求文集及詩苑英華書」では、蕭統は「子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水でたのしんだ故事（南皮のあそび）とおなじだよ」とつづっていた。つまり以前は、曹丕の多様な属性のうちから、賢才とともに南皮であそぶ好文ぶりを模していただけだった。しかしこの書簡では、それにくわえて、賢才の死を哀悼する太子像も継承しているのである。このとき、蕭統は二十七歳。まだ青年といつてよいぐらいの年齢だが、しかし三十一歳での逝去をかんがえると、それほどわかいとはいえない。前回の書簡から五年の歳月をけみした蕭統は、太子たるの自覚とともに、臣下の死を「友人の死のごとく」哀悼する曹丕の資質まで、自分のなかに具有するにいたつたのである。

もつとも、こうした蕭統と曹丕との関係に注目したのは、私をはじめではない。たとえば明の孫月峯は、賢才の逝去をいたんだ曹丕「与朝歌令吳質書」への批評において、つとに

文帝陳思与吳楊等往来書札。但有小致、不為大雅。昭明顧乃寬取。想以其意趣与己有相符者耶。

魏文帝（曹丕）と陳思（曹植）は、吳質や楊修らの臣下とよく書簡を交換した。それらは多少の雅致はあるものの、雅正な作と称するほどの名篇ではなかった。だが昭明太子（蕭統）は、それらの書簡にもきちんと目をくばり、寛大なところで『文選』に採録したのだった。おもつに、それらの書簡の情趣が、自分「の書簡」と通じあつたものがあったからだろつ。

と指摘している（『重訂文選集評』所収）。蕭統が『文選』に曹丕書簡を採録したのは、「それらの書簡の情趣が、自分「の書簡」と通じあつたものがあったからだろつ」という趣旨である。ここでいう情趣が似ている書簡とは、曹丕の「与朝歌令吳質書」「与吳質書」、そして蕭統の「答湘東王求文集及詩苑英華書」「与晋安王綱令」などを

さすのだらう。つまり、これらの書簡にみえる、太子でありながら臣下と文雅をたのしんだり、その死を「友人のように」哀悼したりする姿が、ふたりに共通していることを指摘しているのである。

さて、「与晋安王綱令」をみてきたが、蕭統の哀悼書簡は、まだほかに二篇ほど残存している。それらも紹介しておこう。いずれも賢才が逝去した報に接して、その死をいたんだ書簡である。

まずは、右の「与晋安王綱令」とおなじ、二十七歳のときにつづった「与殷芸令」。これも明山竇の逝去を報じたものだ。『梁書』明山竇伝に、「明山竇は」大通元年に卒す。時に年八十五。詔して侍中・信威將軍を贈り、諡して質子と曰う。昭明太子は為に哀を挙げ、錢十万、布百匹を贈る。並びて舍人の王頤をして喪事を監護せしむ。又た前司徒左長史の殷芸に令を与えて曰く「とあって、この書簡をひく。すると、蕭統は北兗州から書簡が到着し、明山竇が逝去したという知らせをきくや、すぐこの令をかいいて殷芸におくつたのだらう。」<sup>(6)</sup>

北兗信至、明常侍遂至殞逝。聞之傷怛。

此賢「儒術該通、温厚淳和、授經以来、迄今二紀。

志用稽古、倫雅弘篤。

若其上交不諂、造膝忠規、非顯外迹、得之胸懷者、蓋亦積矣。撰官連率、行当言歸、不謂長往、眇成矚日。追憶談緒、皆為悲端、往矣如何。昔經聯事、理当酸愴也。

北兗州の地から信使が到着し、常侍の明山竇どのが逝去されたそうです。この知らせをきいて、私は悲痛にくれております。

この賢人たるや儒学にあまなく通じ、精神は古道を体得され、温厚にしてなごやか、雅正にして篤実なかたでした。国子学で経学を教授し、現在まで二十四年になられます。明どのは高位のひとつにおもねるこ

となく、親身になって忠告されましたが、それは、はつきり口にだすことなく、それとなく了解させるよ  
うなやりかたでした。そうした姿勢をつらぬかれて、もつずいぶんになります。北兗州の太守を兼任され、  
まもなく京師へお帰りになるはずでしたが、なんと逝去されてしまい、すべてが過去のこととなってしま  
いました。

明どのとの議論を想起しては、どれもこれも悲しみにくれるばかり。彼は逝かれたのです、どうしよう  
もありません。貴殿（殷芸）も以前、ともに東宮で仕事をともにされましたので、きつと悲嘆されている  
ことと存じます。

この書簡でも、蕭統は経歴や人がらを叙しつつ、明山賈を哀悼している。初句「北兗より信至れり」とあるの  
は、明山賈が北兗州赴任中に逝去したので、当地から逝去の連絡がやってきたのだらう。また第二句で「明常侍  
は遂に殞逝するに至れり」とあるのは、明山賈が散騎常侍の職にもついていたので、「明常侍」と称したのであ  
る。さらに「遂に」であり、「遽に」<sup>にわか</sup>でも「忽として」でもないのは、その死がある程度予期されていた、とい  
うことなのだらう。なんととっても、逝去時は八十五歳の高齢なのだ。

この種の哀悼書簡はワンパターンになりやすい。だが「国子学で経学を教授し、現在まで二十四年になられま  
す」は、このひとだけに通用するものであり、類型的な表現ではない。さらに、「貴殿（殷芸）も以前、ともに  
東宮で仕事をともにされましたので、きつと悲嘆されていることと存じます」は、自分もかなしいが、貴殿もお  
なじ思いでしょう、ということだ。これは自分の悲しみをつつたえるだけでなく、相手の心情もおもいつての  
発言である。こうした発言ができるところが、蕭統の気くばり名人たるゆえんだらう。

もう一篇は「与張續書」である。これは中大通三年（五三二）、臣下の張緬（四八九〜五三二）が死んだとき、

その弟の張纘（四九九〜五四九）におくった哀悼書簡である。中大通三年といえ、蕭統は三十一歳。この年の三月に、蕭統は池で芙蓉をつんでいたとき、舟より水中に落下するという事故にあった。そしてその一ヶ月後の四月に急逝したのだった。するとこの書簡は、蕭統が逝去する二、三か月まえにつづったことになる。<sup>2)</sup>

賢兄「学業該通、雖倚相之讀墳典、惟今望古、蔑以斯過。自列宮朝、二紀將及、

莅事明敏。」「郗縠之敦詩書、

「義惟僚屬、」「文筵講席、何曾不」「同茲勝賞、

情実親友。」「朝遊夕宴、」「共此言寄。

如何長謝、奄然不追。且年甫強仕、方申才力、摧苗落穎、弥可傷惋。念天倫素睦、一旦相失、如何可言。

言及增哽、攬筆無次。

貴殿の兄上（張纘）は、学問は幅ひろく、政務にも明敏でした。かつて倚相は古書にくわしく、郗縠は詩書に精通していたそうですが、古今をとおしてみても、張纘どの以上のかたはおられません。私の東宮にお仕えただいて二紀（二十四年）ちかくなり、理屈のうえでは臣下なのですが、心情としては親友のような存在でした。文会や講学、あるいは朝夕の遊宴の場では、ともに称賛したり志をかたたりしたものです。

それなのに張纘どのは逝去され、あつというまにお会いできなくなったのです。まだ四十歳になつたばかり、これから才幹を發揮されるはずだったのに、その麗質はこの世からきえてしまい、私はなげきなしむばかりです。兄弟のごとき昵懇な仲をふりかえるにつけ、お亡くなりになられるや、その無念さはいようがありません。ここまでつづつてきて嗚咽がはげしくなり、もはやきちんとした文はつづれなくな

りました。

この書簡も、曹丕書簡の影響下にあるものだろう。語彙のうえでは直接的な関連はみえないが、ときの皇太子が臣下の死を、かくプライベートな立場で哀悼することじたい、曹丕を模したものだといつてよい。皇太子という立場、親近した臣下の逝去という状況、さらにいたましくおもうという心情などが一致し、かつ蕭統に曹丕への思慕が存した以上、どうしても曹丕書簡に接近してゆきやすいのだろう。

この書簡、例によって「前半〃故人の称賛、後半〃故人の哀悼」の構成をとつてとり、一見すると、類型的な内容にみえなくもない。だが、さすがに蕭統だ。各所に、他のだれにもかけぬ切実な悲しみの情を叙して、真実味をかもしだしている。たとえば張緬との関係をかたつては、

「義惟僚属、  
情実親友。」

理屈のうえでは臣下なのですが、心情としては親友のような存在でした。

と叙している。この字句は、いかにも蕭統らしい友愛の精神にとんだものだ。こうした、臣下を友人のごとくあつかう姿勢は、曹丕の書簡の模倣であるとともに、やはり蕭統の「寛和にして衆を容れる」性格のゆえだと解すべきだろう。

さらに末尾では張緬の死をいたんで、

念天倫素睦、一旦相失、如何可言。言及増哽、攬筆無次。

兄弟のとき昵懇な仲をふりかえるにつけ、お亡くなりになられるや、その無念さはいよいよがありません。ぬ。ここまでつづつてきて嗚咽がはげしくなり、もはやきちんとした文はつづれなくなりました。

とつづっている。ここで蕭統は張緬との関係を、「兄弟のごとき昵懇な仲」だと断じているのに注意しよう。皇太子たるもの、ここまでいいきるのは、なかなかむづかしいことではあるまいか。こうした断言があればこそ、末尾の「ここまでつづつてきて嗚咽がはげしくなり、もはやきちんとした文はつづれなくなりました」という発言も、空疎でなく実感をもってひびいてくるのである。このあたり、蕭統だからこそかける哀悼表現だといふべきだろう。

#### 四、(弟) 大仰な表現

つづいて、同母弟の蕭綱(五〇三丁五五二)の書簡文をみてゆこう。

まずは、わかいたきの書簡文をとりあげる。若年時の作には、兄のときもそうだったが、当人が生まれもつ資質が直截にでてきやすいからだ。兄弟の資質の違いをみるのにも、都合がよいだろう。そこで普通五年(五二四)、蕭綱二十二歳のときにつづった「与劉孝綽書」という書簡文をとりあげてみよう。

この劉孝綽あて書簡の執筆年について、吳光興『蕭綱蕭繹年譜』は、普通六年(五二五)、蕭綱が雍州刺史だった二十三歳のときの作だとする。書簡中に「擁旄西邁、載離寒暑」(小生は、ちかごろ旗をおしたてて西方へ出立し、もう寒暑をへてしまいました)とあるのが、その主要な根拠である。ただ、蕭綱が雍州刺史として西方へ出立したのは、その二年前の二十一歳のときであり(雍州刺史だったのは五三三丁五三二)、また文中に「もう寒暑をへてしまいました」とあるので、赴任して一年すぎたころとしたほうがよい。するとこの書簡は、吳氏の推測を一年くりあげ、普通五年(五二四)、蕭綱二十二歳のときの作とみなしておこう。このとき劉孝綽(四八

一〇五三九）は四十四歳で、京師で廷尉の官についていた。

執別瀟瀟、嗣音阻闕

合璧不停、玉霜夜下、

旋灰屢徙、旅雁晨飛。

想 涼燠得宜、既

官寺務煩、等張枳之条理、

雕龍之才本伝、頗得

暇逸於篇章、

時候無爽。

簿領殷湊、同于公之明察。

靈蛇之譽自高、

從容於文調。

頃擁旄西邁、載離寒暑。

曉河未落、弘桂棹而先征、足使

辺心憤薄、

夕鳥歸林、懸孤帆而未息、

郷思遭迴。

但離闕已久、載勞瘁寐、佇聞還駅、以慰相思。

瀟瀟はさんの河のほとりでお別れたあと、便りもとだえてしまいました。日月はとどまることなく、季節

がつぎつぎとめぐり、いまはきれいな霜が夜にあり、旅雁が朝にとびかうようになりました。

私がおもいますに、「貴殿がおられる京師の地は」寒暖の変化は時期に応じ、氣候も季節にたがわぬ

ことでしょう。官署の仕事は繁忙で、書類がうずたかくとも、貴殿は張枳之（漢の政治家）のごと

く的確に処理し、于公（漢の于定国の父）のごとき明察をふるっておられることと存じます。貴殿の雕龍

のごとき能力はつとに有名ですし、靈蛇のごとき声譽はたかまるばかりです。ですから「多忙ななかでも、

のんびりと文学の道に心をあそばせ、詩文を諷詠されておられることでしょう。

さて小生は、ちかごろ旗をおしたてて西方へ赴任し、もう寒暑をへてしまいました。朝は空の星が

えぬうちに、もう舟棹をこいで出発し、夜は鳥が林にかえっても、まだ孤帆をかけたままで休息もとれま

せん。おかげで望郷の情がつのり、故郷への想いがせまってきます。貴兄とお別れせずいぶんたち、日

夜おもいしたっています。たたずんで「あなたのこ返事をはこんできた」駅馬の音を耳にすれば、私の気もちもなぐさめられることでしょう。

さて、この二十二歳時の書簡文、任地の雍州から都の劉孝綽の安否をたずねたものだが、とりたてて用件があつたわけではなさそうだ。この劉孝綽という人物は、父や兄からも信頼されていた文壇の大御所だが、「氣に仗りて才を負い、陵忽する所多し」（『梁書』本伝）という、むつかしい性格の持ちぬしでもあつた。しかも、この三年前には兄の文集を編纂するなど、人脈的には自分より兄のほうにちかかつた。そうした孝綽にあてたものなので、わかき蕭綱も「皇室の一員といえども」それなりに内容や表現に留意したにちがいない。随所に注意ぶかい配慮がみつけられる。

まずの初句「灞澹の河のほとりでお別れした」（原文は「執別灞澹」）は、虚構ふう表現によって意匠をこらしている。というのは、この灞水と澹水は江南ではなく、とく長安付近をながれる河川であるからだ。漢代ではよく、この川のほとりで旅びとを送別した。だから蕭綱は、じつさいは健康を出発し、長江をさかのぼりつつ雍州までいたつたのだが、この書簡では、あえて北方の灞水と澹水を借用して、「手を」執りて灞澹に別れ」とつづつたのである。このフィクションふう表現は、蕭綱としては文壇の大御所にむけて、せいっぱいしゃれつつもりなのだろう。

これにつづく「合璧」の聯は時間の経過をいい、「玉霜」の聯は秋の時候を叙したものだが、あまり清新な表現とはいえない。前聯のうち、「合璧」云々はまだよいが、「旋灰」云々は特殊かつ難解（注8参照）な表現であり、若年ゆえのこりすぎだろう。また後聯の「玉霜」や「旅雁」の字句は、あたかも月令から語をひろつてきたかのときで、陳腐な措辞だといふべきだろう。こうした時候の変化を叙する字句は、歳をかさねてからの書簡

において、もっとぐつと洗練されたものになる（後述）。

つづいて、は孝綽の才腕をたたえた部分だが、ここでは典故にくふうをこらしている。たとえば、孝綽の有能ぶりをたたえるのに、「張釈之のごとく的確に処理し、于公のごとき明察をふるっておられる」と叙している。ここで典故につかつた漢の張釈之と于公は、名廷尉として著名な人物だ。それによって、このとき廷尉卿の官にいた孝綽を、すぐれた廷尉だとたたえようとしているのである。巧妙な典故利用だといってよからう。

さらに、「雕龍のごとき能力はつとに有名ですし、靈蛇のごとき声誉はたかまるばかりです」の部分には、孝綽の詩文の腕をたたえたものだ。ここで蕭綱は、「雕龍」云々で『史記』孟荀列伝、「靈蛇」云々で『淮南子』覽冥に依拠した典故を、それぞれ使用している。前者は孝綽の華麗な詩文を「騶夷すうせきがつつつた華麗な文」になぞらえ、後者はやはり孝綽の卓越した文才を「隋侯の珠」に比擬したものである。これも文壇の先輩に敬意を表して、彼なりに表現をこらしたものだらう。

ただ、さきにもいったように、この書簡は孝綽のご機嫌うかがいをしただけの、かるいあいさつ程度のもにすぎない。そうしたかるい書簡に、右のごとき典故を列挙するのは大仰すぎよう。そのため、この部分は、「典故をふくんだ」褒辞がうきあがってしまつて、巧言をならべたにすぎないという印象がなくなかない。そのせいか、の末尾で望郷の情をのべ、返書をまつ旨を叙しているが、あまり真実味が感じられなくなつてしまつた。こつはいつているものの、ただ形式的、儀礼的につつただけで、ほんとうは、それほど返書をまちわびているのはあるまい、という感じさえしてくるのである。

いっぽう、の「曉河未落、払桂棹而先征、夕鳥帰林、懸孤帆而未息」の隔句対は、わかき蕭綱の会心の字句だといってよからう。「曉」と「夕」の対置のなかで、多忙な雍州刺史としての日々をかたりつつ、景情が融合

したゆたかな詩情をかもしだしている。許楹はこの四句に「深情婉致、娓娓動人」（ふかい思いや婉曲なおもむきがあり、その巧緻な叙しかたはよむ者を魅了する、の意）と評しているが、たしかにそうした印象をあたえる佳句だといってよからう。

以上、「与劉孝綽書」について気づいたことを指摘してきた。おおざっぱに言えば、この書簡文は内容形式とも、そつなくつづられた存問である。だが相手を意識しすぎたせいか、表現が大仰になりすぎた傾向があつて、そのぶん真実味がとぼしくなった箇所もある——とまとめてよからう。好意的にいえば、蕭綱の詩囊に、美辞や麗句がぎっしりつまっていたので、なんでもない存問においても、ついそれがあふれでてしまった、といえようか。この書簡をうけとつた劉孝綽、大仰な褒めことばに苦笑しただろうか。それとも自尊心をくすぐられて、いい気もちになつただらうか。

さて、二十二歳時の「与劉孝綽書」は大仰な表現が特徴的だったが、おなじような傾向は、後年にかかれた書簡「与劉孝儀令悼劉遵」でも顕著である。そこで、つぎに「与劉孝儀令悼劉遵」を考察してみよう。この書簡は標題のとおり、劉遵（四八八―五三五）の逝去を哀悼したものである。したがってこの書簡の執筆は、劉遵が四十八歳で亡くなつた大同元年（五三五）、蕭綱三十三歳のときとしてよからう。おくつた相手の劉孝儀（四八四―五五〇）は、劉遵の従兄にあたる人物である。

賢從中庶、奄至殞逝、痛可言乎。

其 孝友淳深、

内含玉潤、美譽嘉声、流於士友、

言行相符、

文史該富、琬琰為心、

立身貞固、外表瀾清。

終始如一。

辞章博瞻、玄黄成采。

「既以鳴謙表性、未嘗」造請公卿、是以「新沓莫之攀、自」阮放之官、栖遲門下、已踰五載。  
 「又以難進自居、」締交采利、杜武非之知。「野王之職、」  
 「同僚已陟、而怡然清靜、不以少多為念。確爾之志、亦何易得。」西河觀宝、書籍所載、必不是過。  
 後進多升、東江独歩、

吾「昔在漢南、連翩書記、」良辰美景、鷓舟乍動、

「及忝朱方、從容坐首、」清風月夜、朱鷺徐鳴。

未嘗「一日而不追隨、酒闌耳熱、言志賦詩。」校覆忠賢、益者三友、此實其人。

「一時而不会遇。」推揚文史、

及弘道下邑、未申善政、而能使「民結去思、此亦威鳳一羽、足以驗其五德。」

野多馴雉、

比在春坊、載獲申晤。「博望無通寶之務、所賴故人、時相媿偶。」

司成多節文之科、

而此子溘然、突可嗟痛。惟与善人、此為虛說。天之報施、豈若此乎。想卿痛悼之誠、亦當何已。往矣奈何、

投筆惻愴、吾昨「欲為誌銘、吾之劣薄、其生也、不能掬揚吹獻、使得聘其才用。」

並為撰集、

今者為銘為集、何益既往。故為痛惜之情、不能已已耳。

中庶子だった貴殿の従弟、劉遵どのが急逝されました。この悲しみは、いいようがありません。

遵どのは、じつに父母に孝、兄弟に友であり、人となりは堅固なかたでした。内心に美徳をいただき、外

見は清波のごときでした。その声望ぶりは名士のあいだにひろまり、言行一致ぶりは終始一貫しておりました。文史の知識もゆたかで、うるわしい品格をそなえ、また詩文は博識でみちあふれ、多彩な修辭をくりひろげられました。

氏は謙遜な性格だったので、立身が不遇でも平気でした。公卿のもとに伺候せず、栄利を追求されませんでした。そういうわけで山濤「のごときひと」に推挙されることもなく、杜預「のごときひと」に名を知られることもありませんでした。阮放の官（中庶子）や桓伊の職（地方官）については、「出世せず」無聊をかこつ日々が五年以上にわたったのです。同僚は昇進し、後輩も官位があがりましたが、それでも氏は悠々として清浄さをたもち、俸禄の多少も気にされませんでした。そのゆるがぬ姿勢は、えがたいものです。「西河觀宝」や「東江独歩」など古書に記載された話柄も、遵どの以上ではありません。

私がかつて漢南にいたとき、遵どのはずつと書記をつとめ、朱方に任せられたときも、悠々として首座でお仕えしてくれました。良辰や美景、清風や月夜のおり、そして鷓舟がゆれ、朱鷺が鳴き声をあげるようなとき、氏は一日も私にしたがわぬことなく、一時でも顔をみぬことはありませんでした。酒たけなわとなり耳朵がほてってくるや、志をのべて詩をつくりあつたものです。そして古今の忠賢を論じ、文史を議論しました。益者三友といいますが、氏こそはそういう人物でした。

また、遵どのは地方にでて教化されるや、とくに善政をほどこさないうちに、民衆は氏の離任をさみしくおもい、野原には氏をしたう雉があらわれたのです。これは瑞鳥が出現したのおなじで、氏の徳望ぶりを証明するものです。最近私の東宮につかえてくれ、我われはよく話をする機会がありました。博望苑に賓客がいなくても、教育係としてなにかと配慮してくださるなど、信頼できるふるなしみ（劉遵）は、

いつも私の相手をしてくれました。

ところがこの遵どのが、忽焉として逝去されたのです。じつにいたましいかぎりです。天道は善人にくみずといいますが、それは事実ではありませんでした。天の応報が、こんなにひどくてよいのでしょうか。貴殿をおもつに、きつと哀悼しつづけて、やまぬことでしょうか。でも劉遵どのは逝去されたのです。どうしようもありません。筆をほつりなげ、ただいたむだけです。昨日、私は氏の碑銘をつくり文集を編纂しようとおもいました。だが私は愚かなことに、生前に氏の名声をたたえようとせず、才能を發揮させることもしなかつたのです。いま、氏のために碑銘や文集をつくつたとて、いったいどうなるのでしょうか。そうおもえば、ますます痛惜の情がやまなくなってくるのです。

この「与劉孝儀令悼劉遵」をかけたときは、蕭綱は皇太子になつて五年目だつた。太子になるまえの蕭綱は、皇室生まれの宿命だつたが、要地の刺史に任ぜられて、あちこちで鎮撫につとめてきた。その間、十五歳年長の劉遵はずつと蕭綱につかえ、ながく苦勞をともししてきたのだつた。そうした最側近というべき臣下に死なれたのだから、蕭綱の悲しみもおおかつたのだらう。では、その劉遵の死を哀悼したこの書簡は、いかにつづられているのだらうか。

私見によれば、この書簡の特徴は四つある。一つめは、右の「与劉孝綽書」とどうよう表現が大仰で、褒辞がうきあがり気味であること、二つめは文学への関心を表明していること、三つめは賢才、なかでも文学の士との交流を叙していること、そして四つめは、やはり曹丕を意識していること——この四つである。

まず表現の大仰さからみてゆこう。哀悼する書簡だから、故人をたたえ、逝去をおしむのはとうぜんだらう。だから、「父母に孝、兄弟に友であり、人となりは堅固」と人がらをたたえ、「詩文は博識でみちあふれ、多彩な

修辭をくりひろげ」たと才能を強調するのも、べつに問題はない。また典故を多用して、劉遵を古人に比擬することも、めずらしいことではない。

そうではあるが、しかし「氏は地方にでて教化されるや、とくに善政をほどこさないうちに、民衆は氏の離任をさみしくおもい、野原には氏をしたう雉があらわれたのです」の表現となると、さすがに大仰すぎるといわねばならない。くわえて、「天道は善人にくみすといいますが」云々の「老子」第七十九や、「天の応報が、こんなひどくてよいのでしょうか」の「史記」伯夷列伝の利用なども、やや大仰かつ陳腐だといってよさそうだ。蕭綱としては、劉遵の徳望ぶりを強調し、その逝去をいたもつとしたのだろうが、称賛や悲痛のしかたがおおげさすぎて、真実味がとぼしくなつてしまつた。こうしたところに、さきの「与劉孝綽書」とおなじ、表現が大仰という印象をうけてしまつのである。

つづいてべつの二特徴、文学への関心と、賢才（文学の士）との交流についても、みていこう。この二つの特徴も、すぐ判別できる。すなわち、つぎがそれである。「良辰や美景、清風や月夜のおり、そして鷓舟がゆれ、朱鷺が鳴き声をあげるようなとき、氏は一日も私にしたがわぬことなく、一時でも顔を見ぬことはありませんでした。酒たけなわとなり耳朶もほてつてくるや、志をのべて詩をつくりあつたものです」（原文「良辰美景、清風月夜、鷓舟乍動、朱鷺徐鳴、未嘗一日而不追隨、一時而不会遇。酒闌耳熱、言志賦詩」。この部分は、蕭綱が兄とどうよう、文学に関心をもち、賢才との交流をこのんでいたことをしめしている。

またそれと同時に、第四の特徴、つまり曹丕書簡を模していることにも注意しよう。すなわち、右の文の先蹤として、曹丕「与呉質書」に「昔日の遊びし処、行けば則ち輿を連ね、止れば則ち席を接す。何ぞ嘗て須臾も相失わん。觴酌の流行し、糸竹の並び奏するに至る毎に、酒は闌に耳熱し、仰いで詩を賦す」とあり、またおなじ

く曹丕「与朝歌令吳質書」に「昔日の南皮の遊びを念う毎に、誠に忘るべからず。……白日既に匿れ、繼ぐに朗月を以てす。同じく乗り並びに載りて、以て後園に遊ぶ。輿輪は徐に動いて、参従は声無し。清風は夜起りて、悲節は微吟す」とある。つまり蕭綱は、この曹丕の二書簡をくみあわせて、右の部分を叙しているのである。

さらに、亡き劉遵の文集を編することを叙した部分でも、蕭綱は曹丕書簡を模している。すなわち、蕭綱書簡の「昨日、私は氏の碑銘をつくり文集を編纂しようとおもいました」(原文「吾昨欲為誌銘、並為撰集」)は、曹丕「与吳質書」の「頃其の遺文を撰して、都て一集と為す」という一節を意識したものである。そもそも劉遵の文集を編することをおもいついたことじたい、曹丕の前例があつたからにちがいない。つまり曹丕の書簡文は、蕭綱書簡の字句だけでなく、その考えかたや行動にまで影響をあたえているのである。

こつした蕭綱の曹丕模擬は、もちろん、兄蕭統のそれを継承したものにちがいない。亡き兄をついだ蕭綱にとつても、やはり曹丕は理想の太子だったのである。こつした曹丕模擬、蕭綱が真に曹丕を尊敬していたからなのか、それとも兄がそうだったので自分もという、故人への競争心のゆえだつたのだろうか。この疑問、一概にはこつと判定しにくいのが、おそらく蕭綱の脳裏には右の両様の心理が併存していて、それが結果として、こつした書簡や行動となつたのだから。

蕭綱にはもう一篇、これと同種の性格をもつた哀悼書簡があるので、あわせて紹介しておこう。それは王規、あざなは威明(四八八〜五三六)の死をいたんだ「与湘東王令悼王規」である。執筆年は、王規が逝去した大同二年(五三六)、蕭綱三十四歳のときだろう。おかつた相手の湘東王とは、弟の蕭繹のことである。<sup>10)</sup>

威明昨宵、奄復殂化、甚可痛傷。其

風韻道上、千里絶跡、文弁縱横、跌宕之情弥遠、斯実俊民也。  
神峰標映、百尺無枝。才学優贍、濠梁之氣特多、

一爾過隙、永歸長夜、金刀掩芒、去歲冬中、已傷劉子、俱往之傷、信非虛説。

長淮絶瀆。今茲寒孟、復悼王生、

王規どのは昨夜、とつぜん逝去された。じつにいたましいことだ。彼は風趣は群をぬき、気概はかがやいていた。千里をみても彼のごとき俊才はおらず、百尺に傷ひとつない存在であった。詩文や弁舌は自在であり、才能や学識は卓越していた。それでいながら、ものにこだわらぬ精神は高遠で、閑適の情もじつにつよかった。彼こそ俊英といふべきひとであった。

そんな王規どのだが、あつというまに永眠されてしまわれた。あたかも刀が光芒をうしない、淮水の流れがとだえてしまったかのようだ。去年の仲冬には劉遵どのの死をいたんだが、今年の初冬は王規どのの逝去をいたむことになってしまった。「曹丕のいつ」友があいついで逝去する悲しみたるや、まことに虚言ではないぞ。

これも、右の「与劉孝儀令悼劉遵」と同種の性格をもっている。すなわち、王規の逝去のことを、蕭綱は「あたかも刀が光芒をうしない、淮水の流れがとだえてしまったかのようだ」と叙しているが、これも大仰な比喻表現だといふべきだろう。また「詩文や弁舌は自在であり、才能や学識は卓越していた」は、文学への関心をしめし、賢才（才規）との交流をおもいだしたものである。さらに曹丕書簡の模倣としては、「友があいついで逝去する悲しみたるや」（原文「俱往之傷」）の部分がそれだ。この部分は、曹丕「与呉質書」の「昔年疾疫ありて、親故多く其の災いに離る。徐「幹」陳「琳」応「瑒」劉「楨」、一時に俱に逝く。痛み言つべけんや……何ぞ図らん数年の間に、零落して略ぼ尽きるとは。之を言へば心を傷めしむ」の部分に要約し、かつ「逝」を「往」にかえたのだろう。

以上、蕭綱の書簡をよみながら、ここまで四つの特徴を指摘してきた。第一に大仰な表現が目につくこと、第二に文学への関心を叙すること、第三に賢才との交流をこのむこと、そして第四に曹丕を意識すること——以上の四つであった。このうち、第一と第三、第四は兄書簡と共通するものだが、第一の特徴は蕭綱独自のものだとしてよからう。

このように、おなじ血をわけた兄弟ではあっても、蕭綱書簡の表現は、「兄の同種の文章にくらべると」ややもすれば大仰な表現になりやすい傾向があるといつてよさそうだ。たとえば哀悼書簡を例にとると、故人の才腕をたたえるにせよ、死を哀悼するにせよ、なぜか力がいって、「どうだ。自分はこれほど真剣に、そして曹丕そっくりに、亡き人を称賛（哀悼）しているんだぞ」といわんばかりの表現がおおいのである。そのぶん読者につよい印象をあたえるのだが、ときに大仰すぎて真実味がとぼしいときもある、といつてよいであろう。

## 五、(弟) 攻撃性

さて、蕭綱書簡の独自の特徴として、大仰な表現を指摘してきたが、もうひとつの重要な特徴として、他人を難じる攻撃性があげられる。これも兄書簡が有さぬ、蕭綱特有のものだといつてよい。そうした特徴をもったものとして、「与湘東王書」があげられよう。

兄が中大通三年（五三二）の四月に三十一歳で急逝したあと、弟の蕭綱は同年七月に皇太子の地位をついだ。ところが、ひさしぶりに健康にかえってきた二十九歳の蕭綱は、当時はやっていた京師の詩風につよい不満をもったようだ。そこで同年の秋、その憤懣を弟の湘東王（蕭繹）にぶちまけた。それがこの「与湘東王書」である。

ここで蕭綱は、京師の詩風が無気力で情弱になっていると評したあと、つぎのようなげい批判をおこなっている。

思吾子建、一共商推。

「弁茲清濁、使如涇渭、

朱丹既定、使夫

「懷鼠知慚、

論茲月旦、類彼汝南。

「雌黃有別、

「濫竽自恥。

私はわが子建（曹植のあざな。ここでは弟の蕭綱をさす）をおもつては、ともに京師の文学を批評してみたくてならんだ。そして才能の清濁を涇渭のようにはっきり弁別し、人物の評論をあの汝南の月旦のようにやってみたい。朱色がさだまれば「紫色もはっきりするので」才の優劣もきまる。そうやって「優劣を明確にして」エセ詩人たちにおそれいらせ、へボ詩人たちを恥じいらせてやりたい。

蕭綱を曹植に擬しながら（ということとは、自分を曹丕に擬しながら）、京師の詩人たちを批判している。ここでの批判、じつに強烈である。いや批判というより、罵倒だといふべきかもしれない。これほどげい批判は、六朝ではめずらしいといつてよい。ただ、この書簡における批判のげいさやその全体像については、拙著『六朝文評価の研究』第六章（汲古書院 二〇一七）でくわしく論じたので、くりかえすのはやめておく。ここではべつの書簡「答徐摛書」をあげてみよう。<sup>11</sup>

山濤有言、東宮養徳而已、但今与古殊。時有監撫之務、竟不能黜邪進善、少助国章、以此慚惶、無忘夕惕。

「献可替不、仰裨聖政、

「驅馳五嶺、險阻艱難、備更之矣。觀夫

「全軀具臣、未嘗識

「山川之形勢、

「細民之疾苦、

「在戎十年、

「刀筆小吏、

「介冑之勤勞、

「風俗之嗜好。

「高閣之間可來、」玉饌羅前、  
 高門之地徒重、  
 「黃金在握、」容与自熹、

亦復言軒義以來、一人而已。使人見此、良足長歎。

山濤は「太子は自分の徳性をみがくだけでよい」といいましたが、現今は彼のころとはちがっています。私はしばしば「太子として」監国撫軍の任にあたっています。ですが、奸物をしりぞけ賢才を推薦し、いささかでも国政を補佐することができていませんし、また善事をすすめ過誤をさけ、朝政に貢献することも手にあまりません。それゆえ忸怩たる思いにかられ、夜になっても反省をする毎日です。

私は以前、五嶺の地を駆けめぐり、軍事に十年も従事しました。艱難辛苦をつぶさになてきたのです。いま、保身に汲々とした無能な朝臣や、書類をいじくりまわす小役人を見ると、彼らは山川の形勢や兵士たちの苦勞、また民衆の苦しみや風俗の傾向などを、まったくしておりません。りっぱな邸宅から出勤し、官位だけむやみにたかく、ご馳走がまえにならび、富貴も自由自在です。そして周辺にいはいりちらし、ぬくぬくと上機嫌で、「伏羲黄帝よりこのかた、このおれさまがいちばんだ」とおもいこんでいます。こんな連中をみていますと、ため息がでてくるばかりです。

この「答徐摛書」は、蕭綱の家庭教師役といふべき古参の臣下、徐摛（四七四～五五一）にあてたものである。ここで蕭綱は、梁朝の無能な廷臣たちを批判している。するとその執筆は五三二年、彼が建康に帰還してまもないころだろう。太子になったのが同年七月なので、たぶんその翌年の中大通四年（五三三）、蕭綱三十歳ころの作ではないかとおもわれる（吳氏『年譜』百八十一頁も、同年に比定する）。

さて、この書簡の前半では、蕭綱はいかにも立太子直後の若者らしく、殊勝げに自分の力不足を反省している。

ところが後半になると、本音がでてくるのだ。地方で軍役に従事し、「艱難辛苦をつぶさになめてきた」自分からみると、朝臣や小役人どもはたるみきつている、と批判がはじまる。そして「りっぱな邸宅から出勤し、官位だけむやみにたかく、ご馳走がまえにならび、富貴も自由自在です。そして周辺にいばりちらし、ぬくぬくと上機嫌で、伏羲黄帝よりこのかた、このおれさまがいちばんだとおもいこんでいます」と、はげしくいきどおっている。このあたりの憤懣のぶちまけぶりには、「与湘東王書」とよく似たものといつてよい。現実においても、蕭綱は「彼からみて」無能な廷臣たちに辛辣にあたっていたのだらうか。

こうした攻撃性を感じさせる傾向は、現存している人物だけでなく、故人に対してもおなじだった。つづいて、蕭綱が過去のひとを攻撃した書簡「答張纘謝示集書」（「張纘の集を示ししを謝するに答ふる書」と訓じるべきだろう）もあげてみよう。この書簡は右の「答徐摛書」より四、五年前の作だとおもわれる。吳光興「蕭綱蕭繹年譜」は大通元年（五二七）、蕭綱二十五歳のときの作とし、つぎのようにいふ。蕭綱は当時、雍州に駐屯していたが、そのころ臣下の陸罩が蕭綱の文集（梁簡文帝集）八十五巻を撰した。<sup>12</sup> 蕭綱はその自分の文集を張纘にみせてやったので、張纘は「謝示集書」（集を示ししを謝する書）という感謝する書簡をおくった。それに対し、蕭綱が返書としてつづつたのが、この「答張纘謝示集書」である——と。<sup>13</sup>

綱少好文章、於今二十五載矣。窃嘗論之、

日月參辰、尚且

著於玄象、而況

文辭可止、

火龍黼黻、

章乎人事、

詠歌可輟乎。

不為丈夫、楊雄美小言破道、論之科刑、罪在不赦。

非謂君子、曹植亦小弁破言。

至如「春庭落景、秋雨且晴、浮雲生野、時命親賈、車渠屢酌、

「軒蕙承風、檐梧初下、明月入樓、乍動嚴駕、鸚鵡驟傾。

伊昔三辺、久留四載、胡霧連天、時間塢笛、或郷思悽然、

「征旗弘日、遥聽塞笳、或雄心憤薄、

是以「沈吟短翰、寓目写心、因事而作。

補綴庸音、

私はわかいころから文学好きでして、いまにいたるまで二十五年になります。かつて文学について論じたこともあります。「日月星辰や火龍翻蔽かりゅうふんぷつ（華麗な模様）でさえ、「その意思や意義が」天象にあらわれ、地象にしめされている。されば、ひとはどうして文学の創作をとどめ、詩歌の詠唱をやめられようか。りっぱな男は文学などつくらないとは、揚雄のじつにつまらぬ発言であるし、辞賦を創作したとて君子とはいえないとは、曹植のまたくだらぬ意見である。この二人の刑罰を論ずれば、その罪はゆるすわけにはゆかない」と。

春の庭に陽光がそそぎ、蕙草が風にゆれる。あるいは秋雨があたり、軒の梧が落葉する。浮雲が野原のうえにつかび、明月が高楼にさしかかる——そうしたころになると、私は親族や賓客たちに命じて、馬車を用意させます。そして車渠の杯に酒をくみ、鸚鵡の杯をかたむけるのです。あるいはむかし西辺の地で、ながいこと四年も駐屯しました。当地の濃霧が空にみちて、征旗に光がそそぐなか、ときどき村里の笛音をきこえ、とおくから要塞の笳声がきこえます。すると私の心に望郷の念がきざし、また勇猛な精神がわきおこったものでした。

こういふふうにして、私は短詩を吟じて下手な詩句をつづつたのです。そして風景をみて感情をよびおこし、さまざまな出来事に応じて詩をつくつたものでした。

この書簡、末尾が尻切れとんぼなので、おそらく完篇ではないのだろう。ただ書簡の主旨はなんとかよみとれる。前半(「罪在不赦」まで)で自分の文学論をのべ、後半で自然に興を感じて創作することを叙しているようだ(ひよっとすると、後半も文学論なのかもしれない)。ここで注目したいのは、文学論を叙した前半のほうである。この冒頭では、蕭綱は魏の曹植をつよく意識している。すなわち、この「私はわかいころから文学好きでして、いまにいたるまで二十五年になります」の発言には典拠があり、曹植「与楊徳祖先書」の「僕少小より文章を為るを好んで、今に至るに迄んで二十有五年なり」がそれだ。この書簡をつづつたとき、兄の蕭統はまだ元氣だった。だから蕭綱は、自己を「曹丕でなく」曹植に擬して(しかも蕭綱は幼少時、父武帝から「この子はわが蕭家の東阿(曹植)だなあ」と嘆じられたこともあった。前出)、こういつたのだらう。

だが、みずから曹植に擬しながらも、この書簡では、蕭綱は曹植を批判して、

「りっぱな男は文学などつくらない」とは、揚雄のじつにつまらぬ発言であるし、「辞賦を創作したとて君子とはいえない」とは、曹植のまたくだらぬ意見である。この二人の刑罰を論ずれば、その罪はゆるすわけにはゆかない。

といつているのに注意しよう。この批判は、曹植「与楊徳祖先書」の「辞賦は小道にして、固より未だ以て大義を掄揚し、来世に彰示するに足らず。……豈に徒だ翰墨を以て勲績と為し、辞賦を君子と為さんや」を意識したものだ。つまり、蕭綱は自分が文学をこのむものだから、「辞賦を創作したとて君子とはいえない」といつた曹植に、まことに「くだらぬ意見」であるなあ、と反論しているのだ(揚雄の故事のほうは注13参照)。そして、

それにつづけて「その罪はゆるすわけにはゆかない」といったのは、もちろん冗談ではあろう。だがそつだとして、過去の偉大な文人（揚雄と曹植）にむかつて、かく高飛車な弾劾のことばをなげつけるのは、通常はありえないことだとせねばならない。私はこうした冗談ふうことばに、やはり蕭綱の攻撃性を感じるのである。

蕭綱の書簡で、他人を難じた書簡は、右の三篇にとどまる。すると、蕭綱には他人をたたえた書簡もおおいのだから、この三篇は例外にすぎないだろう、と主張するひともいるかもしれない。しかし私は、そうはかんがえない。私見によれば、この種の攻撃性がめだつ書簡は、うけとつた者や非難された当人はもちろんだが、それによんだ第三者たちも、けつしてこのましいとはおもわなかつたろう。すると、それらの書簡は、どうしても無視したり、廃棄したりされやすかつたろうと想像される。ということは、こうした他人を難じた書簡は、右以外にもたくさんあつたはずであり、そのなかで例外的に残存したのがこの三篇だつたろう、と推測するのである。

## 六、（弟）繊細な感覚

さて、ここまで蕭綱書簡の独自の特徴として、大仰な表現と他人を難じる攻撃性とをあげてきた（兄書簡と共通の「文学への関心」や「賢才との交流」「曹丕への比擬」はのぞく）。この二つは、文学としては健全といいたい特徴だといってよい。しかし蕭綱の書簡には、こうした不健全さを帳消しにするような、すばらしい美点が存している。それは、繊細な季節感と、それによつた清麗な自然描写である。そうした美点をもつた書簡として、「蕭臨川書」があげられよう。

この書簡は中大通三年（五三二）、蕭綱二十九歳のときの作と目される。「蕭臨川」とは齊宗室の蕭子雲、あざ

なは景喬（四八七〜五四九）のことをいう。「臨川」は地名。この年、蕭綱は兄の蕭統が急逝したことによって、皇太子としてたつべく、赴任地の雍州から都の建康へもどってきた。ところが蕭子雲は逆に同年、建康から臨川の地へ内史として赴任したのだった。この「与蕭臨川書」は、蕭綱が地方へ赴任した蕭子雲（このとき四十五歳）へむけ、慰労のためにおくった書簡である。<sup>14</sup>

零雨送秋、江楓曉落、

輕寒迎節、林葉初黃。

登舟已積、殊足勞止、解維金闕、定在何日。

八区内侍、厭直御史之鷹、  
九棘外府、且息官曹之務、  
分竹南川、  
剖符千里。

但 黒水初旋、未申十千之飲。文雅縱橫、即事分阻、清夜西園、眇然未剋、

桂宮既啓、復乖双闕之宴。

想征臚而結歎、若使 弘農書疏、脱還鄴下、必遲青泥之封、

望挂席而霑衿。河南口占、儻歸鄉里、且觀朱明之詩。

白雲在天、瞻之岐路、眷慨良深、愛護波潮、

蒼波無極、敬勗光彩。

しずかにふりしきる雨が、秋のおわりをつげ、肌さむい冷気が、冬の到来を感じさせます。長江周辺の楓は暁に葉をおとし、林の木々も黄変しはじめました。

貴兄（蕭子雲）が舟行してから時日がすぎましたが、さぞおつかれでしょう。京師から出帆したのは、何日ごろでしたっけ。貴兄は宮中の供奉をしては、御史の部屋に宿直するのにあき、九卿の外府につとめ

ては、多忙な宮仕えからのがれようとされたのでしよう。いまごろは、竹符をもって南川の地に赴任し、符節をもって千里のかなたにゆかれたことと存じます。

さて小生は、黒水（雍州）の地から京師へかえったばかりで、まだ「曹植のよつな」斗酒の宴席にでていませんし、桂宮（東宮）の門にはいれたものの、双闕の宴にも参加しておりません。文雅の士をあつめた文会にも、事あつて出席できず、「曹植のよつな」清夜の西園のごとき集いも、いつになったら実現することやら。

貴殿の船での旅だちを想起すれば、せつなくなりまして、あげた帆をおもいだせば、涙が衿をぬらしてきます。楊脩の書疏が「魏の都だつた」鄴にとどけられ、陳遵の口述書簡が郷里にとどいたならば「そのよつに貴殿の手紙が私のもとにとどいたならば」、私は青泥の封をとくのをじれたくおもいつつ、「貴殿の」夏の詩を目にすることでしょう。いま白雲が空にうかび、青波は無限につづきます。あなたが出発した航路を目にすれば、まことに感慨ぶかいものがあります。貴兄はなにとぞ波濤に注意され、りっぱに任務を完遂されますように。

この書簡は、はじめに時候のあいさつを叙し（〜初黄）、ついで劉孝綽の才腕をたたえ（登舟〜千里）、最後に自分の近況をつたえる（但黒水〜）という三つの段からなる構成を有している。こうした「時候のあいさつ——相手のよつな——自分の近況」という三段構成は、当時の書簡文の理想的な形式であつたとかんがえられる。<sup>(5)</sup>右でみた「与劉孝綽書」や、あとでみる「答湘東王書」もおなじ形式をとっており、おそらく蕭綱は意識してこの構成をとつたのだろう。

ところで、私が注目したいのは、そのうちの「時候のあいさつ」の叙述である。この冒頭部分には、現在の

手紙文でも、たとえば「嚴寒の候、寒桜の薄紅がはえております」や、「季春の候、風が初夏の香りをはこんできました」のように、時節ごとの風物を叙することがおおい。こうした慣例がはじまったのが、まさにこの六朝の美文書簡なのだ。蕭綱の書簡では、この における時節の叙しかたがひじょうに清新なのである。

「与蕭臨川書」の部分を再度あげれば、

零雨送秋、江楓曉落、

「輕寒迎節、林葉初黃。」

しずかにふりしきる雨が、秋のおわりをつけ、肌ざむい冷気が、冬の到来を感じさせます。長江周辺の楓は既に葉をおとし、林の木々も黄変しはじめました。

というものだ。この両聯における季節感、じつに繊細なものではあるまいか。まず初聯では、ふりしきる雨と肌ざむい冷気とで初冬の到来を鮮烈に表現している。また後聯のほうでも木々の微細な変化、つまり江辺の「楓」と林葉の「黄」によって、清麗な色彩感をもしだしているのだ。くわえて、整齊された対偶と声律も、この四句を美的なものにするのに貢献しているのに注意しよう。このように、この両聯は形式、内容ともに間然するところがなく、六朝屈指の自然描写だといってよからう。

いっぽう内容的にみると、この書簡はそれほど深刻なものではない。自分といれかわるよう、京師から地方へ赴任した蕭子雲へむけて、「お元気でやっておられますか」とたずねた存問にすぎないからだ。ただ表面的にはそうであるが、背後には、「たぶん」不本意な地方転出を余儀なくされた蕭子雲に対する、あたたかい思いやりの情がひそんでいるのに注意せねばならない。

たとえば、「相手のようす」の「貴兄は宮中の供奉をしては、御史の部屋に宿直するのにあき、九卿の外府

につとめては、多忙な宮仕えからのがれようとされたのですね」は、あなたの地方任官は「左遷ではなく」みずからすすんでのことなんでしょうね、となくさめているのだろうし、また「自分の近況」の「貴殿の船での旅たちを想起すれば、せつなくなりまし、あげた帆をおもいだせば、涙が衿をぬらしてきます」ということは、「皇太子たる」私があなただのことを心配していますよ、だいじょうぶですよ、とはげましているのだろう。こつしたさりげない気づかいのことは、この書簡の魅力だといってよからう。

これを要するに、この「蕭臨川書」は、繊細な季節感という美点にくわえ、あたたかい思いやりもたたえた名篇だといってよい。こつした書簡をつづる素地は、地方の刺史としてこつした日々なかで、やしなわれたのだろう。くわえて、蕭綱書簡の欠点というべき、大仰な表現や他人への攻撃などは、「すくなくてもこの文章では」あまり表面にでてきていない。こつしたところがこの書簡に、しつとりした惜別の情をただよわせ、結果的に後世の人びとの心をつつ名篇となったのだろう。

蕭綱の書簡にはもう一篇、典型的な三段構成をとり、かつ「時候のあいさつ」に繊細な季節感を感じさせる作がある。これもなかなかの名篇なので、ここで紹介しておこう。それは「答湘東王書」と題する書簡である。

この書簡は、吳光興『蕭綱蕭繹年譜』によると、太子となって三年目の中大通五年（五三三）、蕭綱が三十一歳のときに、弟の湘東王（蕭繹）にあててつづったようだ。<sup>16</sup>

暮春美景、  
蘭葉堪把、

風雲韶麗、  
沂川可浴。

弟 召南寡訟、時綴甘棠之陰。

冀州為政、暫止褰櫳之務。

唐景薦大言之賦、  
尽游翫之美、  
致足樂邪。

安太述連環之弁、

吾春初臥疾、極成委弊。雖西山白鹿、懼不能瘡、高臥六安、每思扁鵲之問、豈望文殊之來、

子預赤丸、尚憂未振。静然四屋、念絶修都之香。独思吳客之弁。

属以皇上、慈被率土、甘露聿宣。鳴銀鼓於宝坊、法雷警夢、道俗輻湊、聴衆白黑、日可兩三万。

「轉金輪於香地。」  
「慧日暉朝、遠邇畢集、

独以疾障、致隔聞道、豈止楊僕有関外之傷、第十三日、始侍法筵、所以君長近還、不堪執筆。

「周南起留滞之恨。

敬祖前邁、裁欲勝衣。每自念此、愍然失慮。

江之遠矣、寤寐相思。每得弟書、輕痾遣疾。尋別有信、此無所伸。

暮春の時節は風光うるわしく、風や雲もはれやかだ。蘭の葉も手折ることができ、沂川でも水浴びができるだろう。

おまえは、召南で訴訟がすくなくなると、召公がときどき甘棠の木陰で休憩したようにやすらぎ、また冀州で政務をとったとき、賈琮が視察をしばし中断したようにくつろいでいるのだろう。また唐勒や景差「のごとき側近」は大言賦をささげ、釈道安や竺法汰「のごとき人物」はとだえぬ熱弁をふるっていることだろう。そして当地でいろんな美景をながめられて、きつたのしいことだろうね。

私のほうは、春初に病にかかって横臥し、ひどく衰弱してしまった。西山の白鹿でも治癒できまいとおもい、子豫の赤丸の薬でも効果がないのではないかと心配したほどだった。六安の枕に横臥しては、扁鵲が診察してくれるのをねがい、部屋で安静にしては、修都の香をたつてしまいたいと念じたよ。文殊菩薩さまのお越しはねがわなかったが、それでも吳客の「気をまぎらわせる」弁舌だけでもほしかったなあ。

このごろ天子さまたるや、その慈恩が天下をおおい、甘露もふってきた。銀鼓を宝坊にうちならし、金輪を香地にころがせるや、法雷は夢からさめさせ、智恵は朝日にかがやいている。道俗みなあつまり、遠近のものも集合し、聴衆は日に二三万ほどにもなっている。そうしたなか、私だけは病気のため、ありがたき法話をきけなかった。楊僕は関外にでるのをかなしみ、司馬談は周南にとどまるのをきらったが、それ以上のつらさを感じたよ。ただ十三日になって、やっと法筵にはべることができた。それゆえ君長近還？なのだが、まだ執筆できるところまではゆかない。敬祖前邁？し、服を着られるようになりたいものだ。これをおもつたびに、私はかなしくなるよ。

我われをへだつ大河はひろいが、寤寐におまえのことをおもっている。おまえからの書簡を入手するたびに、病状が軽減してゆくことだろう。また便りをするよ。今回の手紙では、じゅつぶん意をつくせなかつたからね。

この書簡の構成をみておこう。はじめに「で時候のあいさつを叙し（可浴、ついでで弟（蕭繹）の近況をたずね（弟召南、梁邪）、最後の「で自分の近況をつたえている（吾春初）」。これも、明確に「時候のあいさつ——相手のようす——自分の近況」という三段構成をとっている。

さつそく、この書簡の「の時候のあいさつ」に注目してみよう。すると、

「暮春美景、  
蘭葉堪把、  
風雲韶麗、  
沂川可浴。」

暮春の時は風光うるわしく、風や雲もはれやかだ。蘭の葉も手折ることができ、沂川でも水浴びができるだろう。

というもので、これもすばらしい暮春の景色だといえよう。四句目の「沂川可浴」は、『論語』先進の「莫春には春服既になり、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて帰らん」に依拠しているので、対する「蘭葉堪把」句も、なにかの典故をふまえるかもしれないが、出典はよくわからない。いずれにせよこの四句は、典故をつかわぬ即物的な描写（上聯）と、典故による意味的ふくらみ（下聯）とがあいまって、陽春の気もちのよい雰囲気をも、たくみにかもしだしている。

だがそのいっぽう、ここ以外の「相手のようす」や「自分の近況」の部分は、「無用とはいわないが」典故の堆砌（過度の積みかさね）がめだつていて、やや文意がとりにくくなっている。たとえば、の「召南で訴訟がすくなくなると……とだえぬ熱弁をふるっていることだろう」や、の「西山の白鹿でも……弁舌だけでもほしかつたなあ」などがそれだ。こうした典故の列挙（典拠については注16を参照）、全部とはいわないが、半分でもけつたならば、この書簡文はもつと意味がとりやすくなるだろう。その意味でこのあたりの行文は、蕭綱書簡の特徴である表現の大仰さが、ふたたび顔をだしているといつてよい。

くわえて、この書簡文では仏教に関連した用語を、美文のなかに巧妙にとりこんでいるのに注意しよう。その取りこみかたは、たとえば、

「豈望文殊之来、  
独思呉客之弁」

文殊菩薩さまのお越しはねがわなかったが、それでも呉客の「気をまぎらわせる」弁舌だけでもほしかつたなあ。

というものだ。上句は、『維摩經』の「維摩が病気になったとき、文殊菩薩が見舞いにいった」という話をふま

え、下句は、枚乗「七発」の「楚の太子が病気になったとき、呉客が七事をかたつて、太子の病をいやした」という典故をふまえている。つまり『維摩経』の典故を「七発」と対応させているのだが、おなじ病気見舞いという共通点があるので、あまり違和感を感じられない。仏教語の巧緻な取りこみかただといってよからう。さらに仏教語を多用した箇所をあげると、

属以皇上、慈被率土、甘露聿宣。

〔鳴銀鼓於宝坊、

法雷警夢、

道俗輻湊、聴衆白黒、日可両三万。

〔転金輪於香地、

慧日暉朝、

遠邇畢集、

このごろ天子さまの慈恩が天下をおおい、甘露もふってきた。銀鼓を宝坊にうちならし、金輪を香地にころがせるや、法雷は夢からさめさせ、智慧は朝日にかがやいている。道俗みなあつまり、遠近のものも集合し、聴衆は日に二三万ほどにもなっている。

という部分がそれだ。ここではさきに「皇上」「率土」「甘露」などの儒教ふう用語を使用しながら、そのあとに「銀鼓」「宝坊」「金輪」「香地」「法雷」「慧日」などの仏教語をつづけている。ただこれらの仏教語は、優美な陰翳をそえる形容詞(傍点)が冠せられているので、美文のなかに使用しても違和感が感じられない。このあたりも、仏教語をつまぐ伝統的な語彙と融合させ、対偶中にとけこませたものといってよからう。

以上、蕭綱書簡の美点として、繊細な季節感やそれにもとづく清麗な自然描写を指摘し、具体例として「与蕭臨川書」と「答湘東王書」とをあげてみた。私見では、こつした諸作こそ、蕭綱のもっとも文学的に価値のたかい書簡文ではないかとかんがえる。

## 七、兄弟の文学的資質

さて、ここまで蕭兄弟の書簡文について、文学的な見地からその価値や意義を考察してきた。書簡をよむことによつて、兄弟の精神生活や臣下との交流のありかたが、多少ともわかつてきたようにおもふ。この章では、以上の議論をふりかえりながら、蕭兄弟の書簡を比較してその異同をあきらかにし、あわせて個々の文学的資質をかんがえてゆきたいとおもふ。

まず、兄弟書簡の共通点についてみてゆこう。これについては第一に、二人の書簡はともに「文学への関心」と「賢才との交流」「曹丕への比擬」という、三特徴を有していることがあげられる。

たとえば、兄の蕭統は「答晋安王書」において、「炎暑がすぎてすくなくたせいか、時節に感じて興趣もたかまつてきた。秋の風物をまえにすると思いが嵩じてきて、詩心をかきたてられる」とのべて、「文学への関心」をかたつていた。また「答湘東王求文集及詩苑英華書」では、「さらに私の賢才好みは、時とともにひどくなるいっぽうだ。「死馬をかって」駿馬を入手した「あの燕の昭王の」故事にあやかり、まちがつても「あの葉公のように」真の賢才をこわがることがないようにしたいもの」といって、「賢才との交流」をねがっていた。

どうように弟の蕭綱も、「私はわかいらから文学好きでして、いまにいたるまで二十五年になります。……風景をみて感情をよびおこし、さまざまな出来事に応じて詩をつくつたものでした（答張纘謝示集書）」といつて、「文学への関心」をかたつていた。また「与劉孝儀令悼劉遵」では、「私は亡き劉遵とともに」古今の忠賢を論じ、文史を議論しあいました。益者三友といいますが、氏こそはそういう人物でした」といって、「賢才と

の交流」をなつがしがっていた。

兄弟が「文学への関心」と「賢才との交流」の特徴を有するのは、二人ともその底に、「曹丕への比擬」の意欲を存していたからである。蕭統と蕭綱は好文の兄弟だったため、幼時から曹兄弟（丕と植）に擬されがちだった。そのためふたりは前後して太子となるや、ともに曹丕を自任するようになったのだった。右の「文学への関心」と「賢才との交流」は、じつは曹丕の書簡を特徴づけるものでもあり、その意味で、右の二特徴の源流は、「曹丕への比擬」意欲にあったといつてよからう。

兄弟書簡の共通点の第二として、政治への関心のなさがあげられよう。兄弟はあいついで皇太子となり、何年かの中には、帝位をつぐことが予定されていた。とすれば、とうぜん経世にも関心をもつてしかるべきだろう。もちろん、経世に直結した文書としては「表」や「教」「表」などのジャンルがあり、そちらでは「請停吳興等三郡丁役疏」（蕭統）や「臨雍州革命情教」「讓驃騎揚州刺史表」（蕭綱）など、たしかに経世に関連した内容もつづっている。だが皇太子であれば、書簡文においても、多少は政治がらみの話題がでてきてもよからう。ところが兄弟書簡では、そうした政治に関連した事からは、ほとんどみられないのである。

もっとも、兄弟とも一時期、書簡中で政治への抱負をかたつたことはある。たとえば兄は「答晋安王書」において「六籍をひもとき、文史の書にしたしんで、孝友や忠貞の事跡をよんだり、治乱や驕奢の事例を観察したりしている」とかたり、弟も「答徐摛書」において、「私はしばしば「太子として」監国撫軍の任にあたっています。ですが、奸物をしりぞけ賢才を推薦し、いささかでも国政を補佐することができていませんし、また善事をすすめる過誤をさげ、朝政に貢献することも手にあまります。それゆえ忸怩たる思いにかられ、夜になつても反省をする毎日です」とかたつていた。

だが、右のような政治むきの話題は継続せず、けつきよく例外にとどまった。右にあげた曹丕への比擬においても、「そうした賢才との交流たるや」子晋（王子喬）にはおよばぬが、事からは子晋が洛濱であそんだ話に似ているし、子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水でたのしんだ故事（南皮のあそび）とおなじだよ」（蕭統「答湘東王求文集及詩苑英華書」とか、「かつての曹丕たちのように」酒たけなわとなり耳朶がほてってくるや、志をのべて詩をつくりあつたものです」（蕭綱「与劉孝儀令悼劉遵」とかいうだけで、文雅にあそぶ曹丕を追慕するのみだった。

曹丕は経世の面でも、たとえは、宦官や外戚の政治的関与を禁じたり、九品官人法を採用したりするなど、政治的な功績もすくなくなかった。また政治論文の集積たる『典論』もかきのこしている。だが兄弟の書簡では、そうした政治家や政論家としての曹丕には、いっさい言及していない。つまり兄弟は、曹丕が有する各様の属性のうち、文雅にあそぶ文人的側面にはつよい憧れを有していたのだが、政治の業績にはほとんど関心をもたなかったのである。

つづいて、兄弟書簡の差異についてみてゆこう。これについては、第一に、修辞面での違いを指摘すべきだろう。この兄弟書簡、一見するといずれも対偶を多用した、美的な行文であるかのようにみえる。ただ、もつすこしていねいに吟味してみると、おなじ美文であっても、修辞的洗練度にかんがりの差異があることがわかる。兄弟の書簡文について、対偶、四六、そして平仄の整齊状況を調査してみると、以下のようである。

## 兄（蕭統）の書簡

	全句	対句	散句	四六	他句	声律	対偶率	四六率	声律率
答晋安王書	80	32(14 1)	48	65	15	11	40	81	73
答集詩苑書	87	48(16 4)	39	60	27	16	55	69	80
与殷芸令	23	4( 2 0)	19	20	3	2	17	87	100
与晋安綱令	49	10( 5 0)	39	40	9	3	20	82	60
与何胤書	52	30(13 1)	22	39	13	8	58	75	57
与張纘書	25	10( 5 0)	15	23	2	2	40	92	40
合 計	316	134(55 6)	182	247	69	42	42	78	69

## 弟（蕭綱）の書簡

	全句	対句	散句	四六	他句	声律	対偶率	四六率	声律率
与劉孝綽書	28	20( 8 - 1)	8	24	4	8	71	86	89
答謝朓集書	37	28(12 - 1)	9	31	6	11	76	84	85
与蕭臨川書	36	26( 7 - 3)	10	36	0	8	72	100	80
与湘東王書	121	76(18 - 10)	45	100	21	20	63	83	71
答徐纘書	30	18( 7 - 1)	12	24	6	6	60	80	75
答湘東王書	53	28( 8 - 3)	25	46	7	8	53	87	73
与令悼劉遵	83	40(16 - 2)	43	74	9	15	48	89	83
与令悼王規	22	14( 5 - 1)	8	21	1	5	66	95	83
答新渝侯書	25	22( 3 - 4)	3	24	1	3	88	96	43
合 計	435	272(84 26)	163	380	55	84	63	87	76

\* 縦破線より左の数字は数量をあらわす。兄の「答晋安王書」でいえば、全句数が80句であり、対偶をなす句が32句（単対が14聯、隔句対が1聯）、対偶をなさない散句が48句である。四字句と六字句（四六）の合計の数が65句であり、それ以外の句形（他句）が15句である。また声律とは、対偶中の両末字の音声が、「平⇔仄」と対応している聯の数のことである。

\* \* 縦破線より右の数字は百分率であり、単位は%。対偶率は、対偶をなす句が全句中でしめる割合をいう。四六率もこれにおなじ。ただし声律率は、聯中の両末字の平仄が「平⇔仄」と対応している場合の、全聯中での割合をさす。たとえば「答晋安王書」でいえば、一篇中に対偶が15聯あり、そのうちの11聯が「平⇔仄」と対応しているので、声律率は73%となる。

\* \* \* 対偶や四六の認定や声律の判定のしかたについては、拙著『六朝文評価の研究』の「結語 六朝文の評価」を参照していただきたい。

この表をみると、修辭的には弟書簡のほうが、兄書簡よりまさっていることがわかる。「合計」のところの百分率をみてみると、対偶率（兄42%、弟63%）、四六率（兄78%、弟87%）、声律率（兄69%、弟76%）すべてにわたって、蕭綱書簡のほうがうまわまっている。これは、兄の作文能力がおとつていたというより、弟の美文能力が「兄の蕭統や一般の文人よりも」高水準だったということだろう。つまり修辭テクニクにおいては、兄弟は同等レベルではなかった。弟のほうが兄や他の文人よりまさっていた——とってよかろう。

つづいて、差異の第二として、「書簡文中での」感情表現の違いを指摘せねばならない。これについては、すでに前章までで、くわしく指摘してきた。簡単にふりかえてみると、兄書簡では相手、とくに賢才を称賛する姿勢がめだつていて、その賢才が逝去したとき、卓抜な哀悼書簡をつみだしていた。なかでも「与張纘書」中で、蕭統が張纘の死をいたんだ部分、「兄弟のごとき昵懇な仲をふりかえるにつけ、お亡くなりになられるや、その無念さはいいようがありません。ここまでつづつてきて嗚咽がはげしくなり、もはやきちんとした文はつづれなくなりました」などは、称賛と哀悼の情が相乗してうみだした、すばらしい感情表現だといってよかろう。

いっぽう弟書簡では、大仰な表現や他人を難じる攻撃性が特徴的だった。この二特徴は、「感情表現の激しさ」とまとめてよかろう。兄はまだ節度ある称賛や哀悼の情でとどまっていたが、弟は各様の感情、とくに「怒」の情の表出において、「兄とくらへると」格段にはげしかった。たとえば、「与湘東王書」中の「才能の清濁を涇渭のようにはつきり弁別し、人物の評論をあつぬ南の月旦のようになつてみたい。朱色がさだまれば「紫色もはつきりするので」才の優劣もきまる。そうやつて「優劣を明確にして」エセ詩人たちにおそれいらせ、へボ詩人たちを恥じいらせてやりたい」は、「怒」の激しさの典型だといってよかろう。

こうした感情表現の激しさは、あまり健全とはいいいくく特徴だったが、蕭綱の書簡には、そうしたマイナス

を帳消しにするような、すばらしい美点が存していた。それが繊細な季節感と、それによった清麗な自然描写である。これに該当する秀麗な句を、再度しめせば、

江楓曉落

林葉初黄。(与蕭臨川書)

暮春美景、蘭葉堪把、

風雲韶麗、沂川可浴。(答湘東王書)

などだった。

以上、兄弟書簡における共通点と差異について、ざっとみわたしてきた。こうした特徴を有した兄弟書簡であるが、では、その価値や意義は、どのあたりにあるのだろうか。私見によれば、兄書簡は相手の長所を積極的に称賛し、はげます姿勢において、他が有さぬすぐれた価値を有し、弟書簡は繊細な感覚で対象を描写することにおいて、卓抜な意義をもっている、と結論してよからうとおもふ。そこで最後に、そうした両人の文学的資質がもっとも発揮された「とおもわれる」書簡文を提示して、本稿をとじることにしよう。

まず兄書簡では、「与何胤書」をあげよう。この書簡は、蕭統が何胤(四四六〜五三二)にあいたいと嘆願したものである。何胤は梁武帝からも尊重された高士で、当時は著名な人物だった。この書簡の執筆年について、俞氏『校注』は書簡中の体調不良をつつたえた内容と、『南史』本伝に叙する墓地トラブル(母の丁貴賓の死後墓地への蠟鵝埋設 ひとを害する呪術の一種 が発覚して、父の武帝と不仲になった)とをむすびつけ、中大通二年(五三〇)の作だろうと推定されている。とすれば、この書簡執筆時、蕭統は三十歳、何胤は八十五歳だったことになろう。<sup>17)</sup>

某叩頭叩頭。昔 園公道勝、漢盈屈節、況乃義兼乎此、而顧揆不肖哉。

春卿經明、漢莊北面。

但經途千里、眇焉莫因。何嘗不 夢姑胥而鬱陶、心往形留、於茲有年載矣。

想具区而杼軸。

方今

朱明受謝、想撰養得宜、

與時休適。

耽精義、

息囂塵、

激揚碩學、

清風戒寒。

味玄理、

玩泉石、

誘接後進。

志与秋天競高、樂可言乎。豈与

口厭芻豢、

同年而語哉。

理与春泉爭溢、

耳聆絲竹者之娛者、

方今

泰階端平、修日養夕、差得從容。

鑽閱六經、

研尋物理、

既以自慰、

天下無事、

泛濫百氏、

領略清言、

且以自警。

而 才力有限、熱疾憤其神、多慚過目、積卷便忘。是以蒙求之懷、於茲弥軫。

思力匪長。

風眩弊其体。

聊遣典書陳顯宗、申其蘊結。想敬 宜、此豈尽意。某叩頭。

統がもつしあげます。むかし東園公が道にすぐれておりましたので、漢惠帝は鄭重にお迎えしました

し、桓榮（あざなは春卿）が經書にあかるかったので、後漢明帝は師とおおぎました。まして兩者をかね

た何先生であれば、この不肖の私をご指導くださるにちがいないと存じております。ただ私たちのあいだ

は、千里もはなれておりますので、お会いできる機会がありませんでした。「何先生お住まいの」姑胥山

を夢みては心が鬱々とならぬことはなく、また具区の沢を想起しては「お会いすべく」苦心しないことは

なかつたのです。でも心ははやっても、身体は移動できぬまま、今日まで何年もたつてしまいました。

いま朱夏がすぎ、秋風が寒さの到来をつげるころとなりました。おもつに、何先生はきちんと養生し、時候の変化にたがわぬ日々をお過ごしでしょう。そして精密な論理に熱中し、深奥な道理をあじわい、俗世と縁をきり、山水にあそんで、碩学を上げまし、後進をみちびかれていますことでしょう。先生の志は秋空と高さをきそい、理は春泉と勢いをあらそっています。なんとたのしいことでしょう。そうした楽しみは、獣肉をいやというほどたべ、音楽をじつくりきくことなどと、同日にかたれるものではありません。

現在、梁朝は平安にして天下も安泰です。私は日々に静養していますので、くつろいだ日々をすごせています。六経を熟読し、百家の書によみふけて、ものの道理をおいもとめ、清雅なことばをまなんでいます。ですから、気晴らしができ、また自戒もできます。ただ能力にかぎりがあり、思考力もすぐれません。また熱病が私の精神を混乱させ、めまいが体調をみだします。ですから、はずかしいことに書物をもよんで、巻をおくとすぐわすれてしまふ始末です。そういうわけで、何先生に教えを請いたい思いが、ますますつよくなっております。典書の陳顯宗を派遣して、私の悶々たる思いをつたえさせます。何先生のご健勝お祈りします。手紙では意をつくせません。統敬白。

この書簡は、何胤先生は遠地にお住まいなので、これまでお会いできなかつた。先生はあいかかわらず、ご健勝で、後進を善導されていることと拝察する。私は今回こそ先生にお会いして、ご指導いただきたいとねがっている。——とのべたものである。一種の招隠詩ならぬ、招隠書簡だといつてよからう。

蕭統はまず、何胤を前漢の東園公（秦末）漢初の四人の隱者 四皓 のひとり）と後漢の桓榮とに擬している。漢惠帝と後漢明帝が「ともに太子のとき」、この二人を招聘した故事を提示し、自分もそれにあやかっ

何胤をまねきたいというわけだ。ここの「まして両者 東園公と桓榮 をかねた何先生であれば、この不肖の私を指導くださるにちがいないと存じております」の言いかたなど、あいかわらず蕭統らしい、丁寧かつ謙遜したことは遣いだといってよかる。

つづいて では、蕭統は何胤がたどりついた境地を想像して、つぎのようにのべる。それは、

「志与秋天競高、樂可言乎。豈与 口厭芻豢、 同年而語哉。」

「理与春泉争溢、 耳聆絲竹者之娛者、」

先生の志は秋空と高さをきそい、理は春泉と勢いをあらそっています。なんとたのしいことでしょう。そうした楽しみは、獸肉をいやというほどたべ、音楽をじっくりきくことなどと、同日にかたれるものではありません。

というものだ。ここには、相手の長所を称賛するのがうまい蕭統の美質が、よくあらわれている。しかもそうした美質は、巧緻な対偶（本稿でとりあげた蕭統の書簡中では、この作がもっとも対偶率がたかい）によって、うつくしく装飾されているのに注意しよう。なかでも「志は秋天と高さを競い⇓理は春泉と溢を争う」の二句は、何胤の精神と自然の景物とを対置しながら称賛をくわえており、蕭統の対偶のなかでも出色のものといつてよいであろう。

六朝のころは、「現今は名君による太平の世である」とみせかけるため、しばしば何胤のような著名な高士や隠者を、宮廷に招聘しようとする風があった。高士や隠者らは、「天下に道有れば則ち見われ、道無ければ則ち隠る」（『論語』泰伯）という人びとである。したがって、もし彼らが山林からできてきて宮廷にお仕えしたなら、そのことじたいが「天下に道有る」、つまり名君の存在や太平の世を、証明することになるだろう。そうした事

情があったため、当時の隠者招聘は、本心からのものでなく、一種の政治的パフォーマンスであることがおかつたのである。

ところが蕭統のこの書簡は、右のような口吻からすれば、そうした作為的なものでない、心からの何胤招辟だったといつてよさそうだ。なかでも注目したいのは、のどつてもお会いしたいと、嘆願している部分である。「熱病が私の精神を混乱させ、めまいが体調をみだします。ですから、はずかしいことに書物をよんでも、巻をおくとすぐわすれてしまう始末です。そういうわけで、何先生に教えを請いたい思いが、ますますつよくなっております」。蕭統はここで、自分の体調不良をつたえ、だからどうしても先生にお会いしたいのですと、せつせつとつたえている。ここでいう体調不良、俞氏『校注』が指摘するように、真に墓地トラブルに由来するものであったとすれば、詐病でもおおげさな言いかたでもなかったろう。蕭統はほんとうに危機感をもって、何胤になにことを相談したかったのだとおもわれる。

この蕭統、周知のように、周辺に劉孝綽などのすぐれた賢才をあつめて、文学史にのこる『文選』という詩文の選集を編纂した。現在では、彼の詩文創作よりも、その選集編纂のほうに、文学史的にたかく評価されているほどだ。彼が周辺にそうした人材をあつめられたのは、この「与何胤書」にみられるような、真摯に賢才をまねき、指導をつきたいというひたむきさがあつたからだろう。

つづいて弟書簡では、「答新渝侯和詩書」をあげよう。この書簡をおくった新渝侯とは蕭暎、あざなは文明（五〇七～五四四）というひとである。蕭暎は父（蕭愔）が武帝蕭衍の弟なので、蕭綱の従弟ということになる。標題の「新渝侯の和詩に答ふる書」や本文の内容からすると、蕭暎は蕭綱作の艶詩に唱和した。その唱和の詩をよむや、蕭綱は感激してこの書簡をつづつた——という経緯だったようだ。するとこの書簡は、蕭綱が東宮に

はいつて(五三二)以後のものだろう。<sup>(18)</sup>

垂示三首、

風雲吐於行間、跨躡曹左、

珠玉生於字裏、合超潘陸。

「双鬟向光、風流已絶、

高楼懷怨、結眉表色、復有

影裏細腰、令与真類。

「九梁插花、步揺為古。

「長門下泣、破粉成痕。

「鏡中好面、還將画等。

此皆「性情卓絶、故知

吹簫入秦、方識來鳳之巧。手持口誦、喜荷交并也。

新致英奇。

「鳴瑟向趙、始覩駐雲之曲。

「こ垂示いただいた貴殿の唱和詩三首、あたかも風雲が行間にただよい、珠玉が字裏に生じているかのようです。曹植や左思をこえ、潘岳や陸機にもまさった作だとおみつけしました。

「貴殿の詩中の美女たるや」、双鬟そつひんは朝の光にむきあっていますが、もはや輝きはつしなわれ、簪かんざしは花でかざられています、その歩揺は時代おくれになっております。高楼で寂しさをかこちつつ、ひそめた眉には愁いがただよっており、長門宮で涙をながしつつ、化粧がくずれて涙の痕ができています。さらに灯火の影にうつった細腰は、「李夫人の」引写しかとおもわれますし、鏡中の美貌も、「李夫人の」肖像画とそっくりです。

「こうした詩三首は、貴殿の天分が卓越し、斬新な風趣がすぐれていたから、つくられたでしょう。これによって、蕭史が吹簫の巧みさで秦室にむかえられたので、鳳もまねきよせるほどの技だったことがわかり、戚夫人が琴を奏して「息子の」趙王にきかせたので、ゆく雲をとまらせるほどの曲であることがわかる「ように、貴殿の詩才のすばらしさが了解できた」のです。私は貴殿の詩篇を手にもち口ずさみながら、

喜びと感謝の念でいっぱいになったことでした。

この書簡は、貴殿（蕭暎）がつくった「拙詩への」唱和の詩は、まことにすばらしいとのべたものである。いわば書簡の形態をかりて、蕭暎の和詩を批評した作だといえよう。この書簡の内容からみると、蕭暎が和した詩（といふことは、蕭綱のもの詩も）は、怨女の悲しみを叙した宮体ふうの艶詩だったのだろう。つまり蕭綱は、蕭暎の和詩は怨女の悲しみをよく表現していると、称賛しているのである。

この書簡、蕭暎の和詩をたたえながらも、あたかも艶詩の雰囲気そのまま再現したような趣がある。周知のように、東宮にはいつて以後の蕭綱は、こうした艶詩の創作に熱中して、けっきょく『玉台新詠』の編纂を徐陵に命じたのだった。そうしたことをかんがえれば、彼が後半生（立太子以後）にかいた書簡には、現存こそしないが、こうしたものがおかつたのかもしれない。

さて、この書簡中、蕭綱が怨女の悲しみを叙した部分をしめすと、

「双鬢向光、風流已絶、  
高樓懷怨、結眉表色、  
九梁插花、步揺為古。」  
長門下泣、破粉成痕。

「貴殿の詩中の美女たるや」、双鬢そうびんは朝の光にむきあっています。もはや輝きはうしなわれ、簪かんざしは花でかざられています。その步揺は時代おくれになっております。高樓で寂しさをかこちつつ、ひそめた眉には愁いがただよっており、長門宮で涙をながしつつ、化粧がくずれて涙の痕ができています。

というものだ。ここの怨女の描写たるや、閨房中にたえずむ姿を遠望したり、双鬢や「頬の」涙の痕を接写したりと、遠近自在をつくしたものと見えよう。「与蕭臨川書」で發揮されていた繊細な感覚は、ここでは清麗な山水や時節の移ろいなどではなく、怨女のひそめた眉や涙の痕のほうにむけられているのだ。また「高樓」の聯で

は、典拠がかもしだすゆたかな暗示性が、秀逸な印象をあたえていることも指摘しておこう。このあたりをよんだ者は、「曹植」「七哀詩」における「月光がふりそそぐ高樓のうえで、憂い顔でたたずむ怨女の姿を想起するだろつし」(上二句)、また「司馬相如」「長門賦」における「長門宮の奥で失意にくれる陳皇后の悲しみに、心をいためるにちがいない」(下二句)。

こうした関心や題材の変化を、文学的に墮落したと評するか、より洗練したとみなすかは、ひとよつてことになることだろつ。宮体詩の意義をみとめるひとなら、すばらしい描写だと嘆声を発するだろつが、艶情をきらう者からみれば、精神の荒廃以外のなにもでもない、つよく指弾するにちがいない。そうした批評の当否については、ここではとわない。ただ、よくもあしくも、この「答新渝侯和詩書」が、蕭綱書簡が有していた特徴(繊細な季節感と、それによつた清麗な自然描写)の延長上でつづられ、彼の資質がよく發揮された作であるといふことは、だれしも納得できるのではあるまいか。

## 注

(1) 蕭統「答晋安王書」への注釈は以下のとおり。

得五月二十八日疏并詩一首——蕭統が、五月二十八日の日づけの弟の「疏」と「詩一首」をうけとつた、ということ。蕭綱が兄におくつた「疏」は佚だが、「詩一首」はたぶん現存する「心令詩」だろつ。

周環——ここでは「何度もくりかえす」と解した。

慰同促膝——直訳すると、「慰めぶりは膝をつきあわすのとおなじだ」となる。「促膝」は、うちとけて懇談するの意。

知音——『列子』湯問の伯牙と鍾子期の話より、「音楽に通曉する」の意。ここでは、それから転じて「文学を解する者」の意で使用している。

相如奏賦、發嘆凌雲——『史記』司馬相如伝の「相如既に大人の頌を奏するや、天子（漢武帝）大いに説び、飄飄として凌雲の氣有りて、天地の間に遊ぶの意に似たり」をふまえる。

孔璋呈檄、興言愈病——魏志、陳琳伝にひく、典略の「琳は諸書及び檄を作り、草成るや太祖（曹操）に呈す。

太祖先より頭風を苦しむ、是の日も疾發せり。臥して琳の作る所を読むに、翕然として起ちて曰く、此れ我が病を愈せりと」をふまえる。「興言」は「詩経」小雅小明に用例があるが、ここは「發嘆」と対応するので、「詩経」の用例を意識したものでなく、「ことばを發する」ぐらゐの意だろつ。下の「興言届此」の「興言」もおなじ。

樹謏忘瘳——「忘れな草をうえて憂いをわすれる」の意。『詩経』衛風伯兮の「焉くにか謏草を得て、言に之を背に樹えん。願ひ言に伯を思へば、我が心をして瘳ましむ」にもとづく。

触興——事物にふれて感興をおこす。劉勰『文心雕龍』銓賦の「草区禽族、庶品雜類に至りては、則ち興に触れて情を致し、変に因りて会つを取る」にもとづく。

觀物興情——風物をみて感興をおこす。『文心雕龍』詮賦に「夫の登高の旨を原ぬるに、蓋し物を觀て情を興す。情は物を以て興る、故に義必ず明雅なり」とあるのを、そのまま利用したのだらつ。

梁王好士——前漢のとき、梁の孝王が遊説の士を厚し、鄒陽や枚乘や司馬相如をまねいたことをさす。

淮南礼賢——やはり前漢のとき、淮南王の劉安が賓客をまねいたことをさす。

含毫——筆を口にふくんで詩文の構想をねる、の意。陸機『文賦』の「或いは觚を操りて以て率爾たり、或いは毫を含んで邈然たり」にもとづく。

起予——啓発する、の意。『論語』八佾の「子曰く、予を起こす者は商なるか。始めて与に詩を言つべきのみと」にもとづく。

撰養——身体を大切に於て養生すること。六朝の書簡文では習見の語である。ただし、この「撰養得真、与時無爽耳」二句は、上文と意味がつかない。俞氏『校注』が指摘するように、たぶん二句の上に脱文があるのだから。

無爽——「爽」はたがう、の意。

責成有寄——「成るを責めて寄せること有り」と訓じる。「父の梁武帝が蕭統に、監撫の職務をなすよう寄託した」の意だろう。蕭統は、十五歳のとき（天監十四年）に加冠の儀を挙行してもらい、監撫の職をつとめるようになった。

墳史——二墳五典などの古書。

上下数千年間、無人致足樂也——「致足樂也」は、曹丕「与呉質書」の「元瑜の書記は翩翩として、致は樂しむに足るなり」をふまえる。いちおう本文のように訳したが、「無人」と「致足樂也」との連絡がわるいので、俞氏『校注』のいうように、おそらく前後に脱文があるのだから。なおこの部分は、蕭統二十二歳のときの「答湘東王求文集及詩苑英華書」中の「又往年因暇、搜採英華、上下数千年間、未易詳悉」（また以前、閑暇をえたおり、すぐれた五言詩をあつめてみた。近々数十年の作でさえ、網羅できていない、の意）と、よく似ている。

不出戸庭——『易経』節卦の「初九、戸庭を出でずんば、咎无し」をふまえたものか。

天遊不能隱——「天遊」は「莊子」外物に由来し、自然としたしんで自由であるよす。自然としたしめば、「自然も」その姿をかくさない、の意が。

冷泉石鏡——冷水がわきでる泉と鏡のようにひかる岩石。これ以下の四句、内容的には隔句対ぶうに対応しているが、字句が対応していない。対偶のできそこないだろう。

吾就——自分でその地にゆくこと。上の「知之」と対比的に使用されている。

靜然終日——この前後で、蕭統は美見よりも想像力のほうを重視している。現在ふうにいえば、彼は読書好きでインドア派だったといつことだろう。

益友——有益な友。『論語』季氏の「益者三友」にもとづく。

友于——兄弟、また兄弟仲がよいこと。『尚書』君陳の「惟れ兄弟に孝友たり」にもとづく。

未克棠棣——兄弟がいつしよにおれない、の意。「棠棣」は『詩経』小雅棠棣にもとづく語で、兄弟の意。

指復立此——指は主旨の意か。「指は復た此に立つ」と訓じて、かきたいことは以上だ、の意に解した。

促遲還書——あなたのご返事をおまちしています、の意。書簡文末尾にくる常套の語句。

(2) 蕭統「答晋安王書」中の「六籍を汎観し、文史を雜玩す。孝友と忠貞の跡を見、治乱と驕奢の事を觀る」には、古書をよんで古今の治乱から教訓をまなぼつとする意欲がみえている。これとよく似た発言が、弟の蕭綱「悔賦」中にも存している。すなわち、「悔吝を静思し、前史を鋪究し、古を弔い今を傷み、憂いに驚き杞を歎く」がそれだ。こうした政治に對する蕭綱の意欲には、兄からの影響があつたのかもしれない。拙著『六朝の遊戯文学』の付論も参照。

(3) ただしこの蕭統「答晋安王書」は、わずか十五歳のときの作にすぎない。それゆえ書簡中での発言を、過大にかんがえてはいけなからう。だがこれまで、この書簡の内容をシリラスに解しすぎたり、見当ちがいの理解をしたりしたケースも、ないではなかつたようだ。

たとえば、林田慎之助『中国中世文学批評史』四一頁はこの作に對し、「動かずして静かなる立場で、古籍を披見しては、そのなかにおいて山水丘壑に觸れ、人生の諸相をみつめる姿勢は静者の知見に徹しようとするもので、ここにも古典的教養主義者としての昭明太子像を発見することができる」といわれる。この見かた、わずか十五歳時の発言に「人生の諸相をみつめる」とか「静者の知見」などというのは、いくらなんでもおおげさすぎよう。

さらにひどい勘ちがいをしているのが、趙樹功氏である。この蕭統書簡のあたりの発言は、要するに「自分はインドラ派だ」といつているにすぎない。だが、なぜか氏は『中国尺牘文学史』一四四頁において、この書の内容を「山林の氣にみちた文章」だと解される（つまり隠逸の情がつよい、ということだろ）。文中の「触地丘壑」や「山林在目」の句をみ、さらに彼の陶淵明好きも想起して（蕭統は陶淵明の集も編纂した）、つい隠逸志向のほうへ短絡させてしまわれたのだろうか。そしてそうした誤解のうえにたつて、この書簡文に對し、「皇太子の身分にいながら、こんな山林の氣

にみちた文章をかいている。これは「太子の」至尊をはずかしめるものだ。昭明太子は早逝したので帝位にはつかなかった。ただこうした志向をもつようでは、たとえ天子になっていたとしても、たいした功業はなしとげられなかっただろう」と批判しておられる。これは、わるいほうへ過大に解してしまった例だろう（ただし、「山林の氣にみちた」云々は誤解だが、蕭統が書簡中であまり政治に言及しないことは、趙樹功氏の指摘のとおりである。本稿の第七章も参照のこと）。これらに対し、近時に出版された田曉菲『烽火与流星』（中華書局、二〇一〇）は、若年時の作であることを認識したうえで、「答晋安王書」や兄弟応酬の詩に対して、冷静な分析をおこなっている（二〇七―二〇九頁）。本稿も、この冷静な分析を参照させていただいた。やはり兪紹初『昭明太子集校注』や呉光興『蕭綱蕭統年譜』のとき、詳細な注釈本や年譜が出現したあとになると、従前のような誤解はしなくなるのだろう。

(4) 蕭統「答湘東王求文集及詩苑英華書」への注釈は以下のとおり。

詩苑英華——梁書 本伝に「五言詩の善き者を、文章英華二十卷と為す」とあるのが、これだとおもわれる。

諸文製——もろもろの詩文の意だが、ここでは蕭統の文集をさすのだろう。

発函伸紙——文箱をあけて書簡をとりだす、の意。呉質『答東阿王書』の冒頭にもこの句が使用されており、当時、書簡文の冒頭におく常套の語だったようだ。なおこの「紙」は、直接には蕭統の書簡文をさすのだろうが、あとの部分からみると、おそらく文箱には蕭統の詩文も同封されていて、それをさしているのだろう。

事涉烏有、義異擬倫——この二句は、「雖…A…、而…B…」の構文のAに該当する。B（而清新卓爾、殊為佳作）が称賛した内容なので、ここは批判であるはずだ（Aという欠点はあるが、しかしBという長所がある）。するとこの二句は、蕭統の書簡の文や「蕭統が同封した」詩文への批判だろう。「烏有」は虚構、「擬倫」は比喩の意と解した。ちなみに、「事……、義……」の対偶表現は、「文選序」にも「事は沈思より出でて、義は翰藻に帰す」とあり、蕭統の書きくせだったようだ。

文典則絜野——これ以下の六句は、蕭統の文学観を論じるとき、よく言及されてきた有名な一節である。「論語」雍也

の「質、文に勝れば則ち野、文、質に勝れば則ち史。文質彬彬にして、然る後に君子なり」にもとづいている。『論語』では「文質彬彬」、つまり外觀（文）と実質（質）が調和した（彬彬）人物こそが君子である、とのべていたのだが、蕭統はこれを文学論に応用し、修辞の卓越（文）と内容の充実（質）とを調和させた文学が理想である、と主張している。

殊と意会——「殊に意と会す」と訓じる。おまえの書簡文「や同封されてきた詩文」は、わが「意」（文質彬彬をよしとする考え）とびったり合致している、ということだろう。

至於此書——「此書」とは、兄の文集と『詩苑英華』をほしいといってきた蕭繹の書簡（佚）をさす。

与其飽食終日、恣遊思於文林——この二句は、『論語』陽貨の「終日に飽食し、心を用いる所無きは、難いかな」に依拠した表現。また、のちの「文選序」の「余は監撫の余閑、暇日多きに居る。文圃を歴観し、辞林を泛覽す」にも似ている。

登高而遠託——高所にのぼって、遠地のひとに思いをはせる、の意だろう。

密親離則手為心使、昆弟宴則墨以情露——この二句は字の異同がおおくて、意味をとりにくい。いちおう対偶の構造に即して、「密親離るれば則ち手は心の為に使われ、昆弟宴すれば則ち墨は情を以て露す」と解しておく。

市駿——ふつう「千金市骨」（千金もて骨を市う）で使用する。人材を熱望すること。大金で千里の馬の「骨」（凡才）をかいとっている、やがていきた千里の馬（逸材）もかえるようになる。こうした比喻によって、郭隗は燕の昭王に「まず「凡才の」自分を採用せよ」と説いた。いわゆる「隗よりはじめよ」である。ここでは「賢才を熱望する」の意で使用している。

畏龍——すぎだと公言していても、じつさいはそうではないこと。『新序』雑事によると、楚の葉公は大の龍好きだったが、本物の龍が窓から顔をのぞかせるや、あわててにげだしたという。

不如子晋、而事似洛濱之遊——子晋は伝説上の仙人で、王子喬ともいう。『列仙伝』に「王子喬は周の靈王の太子晋な

り。好んで笙を吹き鳳鳴を作す。伊雉の間に遊ぶ」とある。

多愧子桓、而興同漳川之賞——子桓は曹丕のあざな。彼は賢才とともに、南皮で文雅のつどいをたのしんだ（曹丕「与朝歌令吳質書」）。漳川はその南皮の地をながれており、ここの「漳川之賞」は、その南皮のあそびをさす。蕭統はこの種の文雅のつどいを、とくにこのんでいたようである。

必集阮之儔——「阮」は漢末の阮瑀と阮璃をさす。ともに建安七子にかぞえられる文人であり、主君の曹丕とともに文雅なつどいをたのしんだ。

亦招龍淵之侶——龍淵は宝劍の名。すると、宝劍のごときすぐれた人物の意か。「阮之儔」との対応をかんがえれば、能文の士のだれかをさすのだから、典拠未詳につき具体的には不明。

繼之以朗月——曹丕「与朝歌令吳質書」の「白日既に匿れ、繼ぐに朗月を以てす」を模したものか。並命連篇——賢才たちに命じて詩を唱和させた、ということだろう。

英華——文学の精華。ここでは標題にいう『詩苑英華』をさすか。とすれば、五言詩の精華ということになる。

集乃不工——ここからは自分（蕭統）の文集をいう。蕭統は謙遜して、自分の文集におさめた詩文は、「工ならず」といっているのである。

而並作多麗——高步瀛『南北朝文学要』は、「並作」は蓋し当時の同に作りし者ならん。是れ知る、『昭明集』中に原附して他人の作有るを」という。つまり「並作」（並びて作る）は、賢才たちと唱和した詩をさし、そうした作は「麗なる多し」ということらしい。蕭統の文集には、唱和した詩が、自分のものも他人（賢才たち）のものも、すべて採録されていたのだろう。蕭統は謙遜して、それらのうち自分のものはだめだが、他人の詩はすぐれるといっているのである。

皆遣送也——すべておくる、の意。蕭統は弟の蕭繹に、「この手紙とともに、自分の文集と『詩苑英華』をおくってやったのである。

(5) 蕭統「与晋安王綱令」への注釈は以下のとおり。

資忠履貞——訓読すれば、「忠を資りて貞しきを履む」。潘岳「閑居賦」などに「是を以て忠を資り信を履み以て徳を進め、辞を修め誠を立て以て業に居る」とあり、どうやら当時は、「資忠履信」が四字熟語のようにつかわれていたようだ。蕭統はそれをすこし改変して使用したのだらう。

冰清玉潔——氷や玉のようにきよらかだ、の意。曹植「光祿大夫荀侯誄」に「氷の清らかなる如く、玉の潔らかなるが如く、法あるも威ならず、和にして襲ならず」とあるのを、すこし改変した表現。

立身行道——人格をたかめ正道をおこなう。『孝経』開宗明義に「身を立て道を行い、名を後世に揚げ、以て父母を顯らかにするは、孝の終りなり」とあるのを、そのまま使用したもの。

必升孔堂——『論語』先進の「子曰く、由や堂に升れり。未だ室に入らざるなり」とにもとづく表現。

莅事——政務をとりおこなう、の意。『尚書』周官に「字はすして牆面すれば、事に蒞んで惟れ煩つ」とある。

造膝忠規——膝をまじえて、親身になって忠告する、の意。蕭統のすきなことばだったらしく、「与殷芸令」でも使用している。

祗悔——『易』復の「遠からずして復れば、悔に祗る無し」を使用したもの。

零落相仍——これ以下の四句は、曹丕「与朝歌令吳質書」の「元瑜長逝し、化して異物と為る。一念の至る毎に、何れの時か言つべき」を意識してつづっている。

隨弟府朝、東西日久——張率が「弟」(蕭綱)の幕府につかえ、蕭綱の転任にともなって、各地をあちこち移動したことをいう。

(6) 蕭統「与殷芸令」への注釈は以下のとおり。

北兗信至——晩年、明山賓は北兗州の政務を撰行し、その地で逝去した。したがって北兗州の地から信使がやってきたのである。

授経以来、迄今二紀——明山實は儒学に造詣がふかく、梁が天監四年（五〇四）に五経博士をあくや、首座でこれに選任された。逝去のときまで、ちょうど二紀（二十四年）である。

上交不諂——『易』繫辭下に「君子は上に交わりて諂わず、下に交わりて瀆れず」とあり、上句をそのままもちいている。

造膝忠規——膝をまじえて、親身になって忠告する。蕭統のすきなことばだったらしく、「与晋安王綱令」でも使用している。

眇成疇日——「眇として疇日と成る」と解した。上述したような思い出も、「逝去したいまは」すべて過去のものになった、の意か。

昔経聯事——「聯事」は同僚の意。明山實と殷芸とは生前、東宮とともに蕭統につかえていた。

(7) 蕭統「与張纘書」への注釈は以下のとおり。

莅事——政務をとりおこなう、の意。『尚書』周官に「字はずして牆面すれば、事に蒞んで惟れ煩う」とある。この語は「与晋安王綱令」でも使用していた。

倚相之誦墳典——倚相は春秋のころ、楚の左史をつとめた人物。歴史や三墳五典の書にくわしかった。

郤穀之敦詩書——郤穀とも。春秋のころの晋の將軍。『詩』と『尚書』に精通していた。

蔑以斯過——「以て斯に過ぐる蔑し」と解する。かく解するときは、「蔑以過斯」の語順がふつう。

自列宮朝、二紀將及——張纘は天監七年（五〇八）につかえたので、ほぼ二紀にちかい。

年甫強仕——「年甫めて強仕なり」と解する。「強仕」は、『礼記』曲礼上の「四十を強と曰う。而して仕う」にもとづき、四十歳のこと。

(8) 蕭綱「与劉孝綽書」への注釈は以下のとおり。

執別灑澆——灑水と澆水の地を手をとって別れをつげた、の意。灑水と澆水は長安付近をながれる河川である。漢代

ではよく、この川のほとりで旅びとを送別したので、灞渾の名をかりたのだろう。じっさいは、蕭綱は建康を出発し、長江をさかのぼりつつ雍州までいったのである。

合璧不停——日月がのぼってとどまらぬように、時間が経過してゆく、の意。

旋灰屢徙——「旋る灰は屢しは徙る」と訓じて、時節が変化してゆく、の意。後漢のころ、「候気の法」という節気の変化を測定する手法があつて、嚴重に密閉した室内の机上に、十二の律管をおく。その律管のなかに、葦皮をやいた灰をいれておく。そしてその灰が時候の経過にともなつて、とんだり散じたりするようすを観察して、節気の変化をしつたという（『後漢書』律曆志上）。

想——「想」は、「私があなたのことを拝察するに」の意である。したがつて「想」以後は、蕭綱が劉孝綽のことをおもいやつた内容だと解さねばならない。

涼燠得宜、時候無爽——時候のあいさつであり、当時の書簡文の常套の語句。蕭統「答晋安王書」でも、これと類似の「撰養得宜、与时無爽耳」（きちんと養生して、時候の変化にたがわぬ日々をおくろつとおもつ、の意）という語句をつつっていた。

等張积之条理 同于公之明察——張积之と于公（于定国の父）は、ともに前漢の官吏で、司法で公平さをたたえられた。この典拠を布置したのは、劉孝綽も当時、司法をつかさどる廷尉卿だったからだろう。

雕龍之才本伝——あなた（劉孝綽）の華麗な詩文の才は、とうに世間に知られている、という意味。「雕龍」は、もとは「史記」孟荀列伝にもとづき、「駟爽がつつた華麗な文章」の意である。

靈蛇之管自高——「靈蛇之管」は、通常は「隋侯之珠」といい、珍奇なものや卓越した才知の意で使用される。漢のとき、隋侯は傷ついた大蛇をみかけるや、薬をぬつて治療してやつた。そのお礼に大蛇は、珍奇な明珠を隋侯にあたえたという（『淮南子』覽冥など）。ここでは劉孝綽の才能を、そうした隋侯の珠に比擬したものの。

頃擁旄西邁——普通四年（五三三）、蕭綱二十一歳のときに雍州刺史として赴任したことをいうが、ただし、すぐあと

に「載離寒暑」（もう寒暑をへてしまいました）ともいうので、この書簡執筆時は、赴任してしばらくたった時期だろう。

曉河未落——以下四句は、江州での日々の任務（舟で行き来していたようだ）を叙したものだだろう。朝と夜とを対応させた、巧妙な隔句対である。

但離閭已久——これ以下の四句は「あなたのお手紙をお待ちしています」という趣旨であり、当時の書簡文の常套の語句である。

(9) 蕭綱「与劉孝儀令悼劉遵」への注釈は以下のとおり。

賢從中庶——あなた（劉孝儀）の賢明な従弟で、中庶子の官についていたひとの意。つまり劉遵をさす。

新迷莫之拳——「新迷」とは、新胥伯となった山濤のこと。西晋の山濤は、吏部尚書としておおくの人材を推挙したが、劉遵はその山濤のごとき人物に推挙されなかった、の意。

杜武弗之知——「杜武」は杜預のこと。西晋の杜預は「奏上黜陟課略」を奏上して、官吏の貶降と昇進に関する提案をおこなった。劉遵はその杜預のごとき人物にも、真価を知られることがなかった、の意。

阮放之官——阮放は東晋のひと。わかいころは放縦だったが、後年は政績をあげた。ここでは彼が太子中舍人・庶子となったので、「阮放之官」とつつつたのだらう。

野王之職——野王とは、東晋の桓伊の幼時のあざな。劉遵との共通点は、ともに地方官として政績をあげたことか。したがってこの「野王之職」とは、地方官のことをいうのだらう。

不以少多為念——「少多」は進退や得失、の意。そうしたこと念頭におかなかった、ということ。

西河觀宝——「西河」は戦国魏国の地名。史記「吳起伝」の「魏の武侯は西河に浮かびて下れり。中流にして、顧みて吳起に謂いて曰く、美しいかな山河の固たるや。此れ魏国の宝なりと。起對えて曰く、……此れ由り之を觀れば、徳に在りて險に在らず。若し君徳を修めざれば、舟中の人尽く敵国と為らんと」の話柄をふまえる。国家にとつては、

山河の固めよりも君主の徳が大事だということだ。ここでは劉遵の徳望のすばらしさをのべているのだろう。

東江独歩——南方の地で無双である、の意。『晋書』王坦之伝に「坦之、字は文度。弱冠にして郗超と俱に重名有り。時人之が為に語りて曰く、盛徳絶倫たり郗嘉賓、江東独歩す王文度と」とあるのを、すこし字句をいれかえて使用したものか。ここでは劉遵の才能のすばらしさをのべているのだろう。

良辰美景——この句をふくむ「良辰美景、清風月夜、鷓舟乍動、朱鷺徐鳴。未嘗一日而不追隨、一時而不会遇。酒闌耳熱、言志賦詩」の部分は、曹丕書簡を模したものだろう。曹丕「与吳質書」に、「昔日の遊びし処、行けば則ち興を連ね、止れば則ち席を接す。何ぞ嘗て須臾も相失わん。觴酌の流行し、糸竹の並び奏するに至る毎に、酒は闌に耳熱し、仰いで詩を賦す」とあり、また同「与朝歌令吳質書」に、「昔日の南皮の遊びを念う毎に、誠に忘るべからず。……白日既に匿れ、繼ぐに朗月を以てす。同じく乗り並びに載りて、以て後園に遊ぶ。輿輪は徐に動いて、参従は声無し。清風は夜起りて、悲笳は微吟す」とある。また、曹丕書簡を模した謝靈運「擬魏太子鄴中集詩序」にも、「良辰美景」の句がそのままみえている。

益者三友——交際して有益な三種（直、諒、多聞）の友。『論語』季氏にもとづく。

民結去思——「民をして去思を結ばしむ」と訓じる。「去思」は、地方官がさったあと、そのひとを思慕すること。民衆は劉遵の離任をさみしくおもった、の意。

馴雉——雉を馴らすほどの仁政の意で、地方官をたたえる語。『後漢書』魯恭伝にもとづく。ここでは劉遵の仁政ぶりを大仰にたたえている。

博望無通賓之務——博望苑に賓客を接待する仕事がなくとも、の意。「博望」は迎賓のための宮苑の名。漢武帝が太子のためにたてたが、ここではもちろん建康にある太子の居館をさしているのだろう。

司成多節文之科——「司成」は太子の教育係りをいうが、ここでは暗に劉遵をさす。「節文」は物事を程よく裝飾すること。

惟与善人——『老子』第七十九に「天道親しん無し。常に善人に与くみす」とある。

天之報施、豈若此乎——『史記』伯夷列伝の「天の善人に報施するや、其れ何如いかんせんや」をふまえて、すこし変化させた表現。

吾昨欲為誌銘、並為撰集——このあたりは、「与呉質書」のつぎのような一節を意識したものだろう。「頃其の遺文を撰えして、都て一集と為す。其の姓名を觀れば、已に鬼録と為れり。昔遊を追思すれば、猶お心目に在り。而るに此の諸子、化して糞壤と為る。復た道みちうへけんや。」

(10) 蕭綱「与湘東王令悼王規」への注釈は以下のとおり。

風韻道上、神峰標映——兩句とも主述の構造によりつつ、王規の気だかい人がらをかたつたもの。とりあえず、「風趣は群をぬぎ、気概はかがやいていた」と訳しておいたが、風韻、道上、神峰、標映、いずれも六朝になって、はじめで使用されたことはであり、その微妙な陰翳を説明するのはなかなか困難である。

百尺無枝——有用な人材の喩。枚乘「七発」に「龍門の桐たるや、高さ百尺なるも枝無し」にもとづいた表現だろう。濠梁之氣——世俗から脱して悠々としていること。『莊子』秋水の「濠梁の魚が悠々とあそぶのを見て、莊子がたのしんだ」という故事に由来する。

一爾過隙——あつというまに。『過隙』は、白駒がすぎ間をかけぬけるほどの時間、の意。

金刀掩芒——刀が尖端をおおわれる、の意。

俱往之傷——友がつぎつぎと死去した悲しみ。曹丕「与呉質書」にもとづく。このあたりでも、蕭綱は自分を曹丕になぞらえていることに注意。

(11) 蕭綱「答徐摛書」への注釈は以下のとおり。

山濤有言、東宮養徳而已——『山濤啓事』に「東宮は事少なく、徳を養つのみ」とある。皇太子は徳性をみがくだけよく、政務にはたずさわらなくてもよい、ということか。

黜邪進善——「黜邪」「進善」ともに用例はいくつかあるが、『白虎通』考黜に「賢多ければ乃ち能く善を進め、善を進めれば乃ち能く悪を退く」とあるのが、比較的ちかい用例である。

献可替不——『左氏伝』昭公二十二年に「君に可と謂う所あるも、否<sup>ひ</sup>有らば、臣は其の否を献じ、以て其の可を成す。君に否と謂う所あるも、可なる有らば、臣は其の可を献じて、以て其の否を去らしむ」をふまえた表現だろう。

夕惕——夜まで終日おそれつしむ、の意。『易』乾卦の「君子は終日乾乾として、夕べまで惕う」にもとづく。

在戎十年——「在戎」は軍務にあつたことをいうのだろう。蕭綱は建康に帰還して太子になる以前は、雍州（五三三～五三二）や南徐州などでなどで刺史をつとめていた。

險阻艱難、備更之矣——『左氏伝』僖公二十八年に「晋侯は外に在ること十九年。而して果たして晋国を得たり。險阻艱難は、備さに之を嘗めり」とあるのを、そのまま利用した表現。

全軀具臣——「全軀」は保身にはしる、の意。『具臣』は有能でなく、ただ員数にはいつているだけの臣下。『論語』先進に「今、由や求や、具臣と謂うべし」とある。

介冑——鎧や兜などの武装をいう。ここでは武装した兵士。『史記』絳侯周勃世家に「將軍亜夫は兵を持し搢して曰く、介冑の士は拝せず。請う軍礼を以て見えんと」とある。

泥苔栗斯——難解な字句だが、尊大にふるまう、の意に解する。

軒羲以來、一人而已——『魏志』卷十一胡昭伝に「身を独立の処に居らせ、年を延ばして百を歴し、壽は期<sup>き</sup>を越す。上識と雖も尚<sup>な</sup>つ能<sup>あた</sup>わざるなり。羲皇より已來、一人あるのみ」とあるのを、すこし手直した表現。

(12) 蕭綱二十五歳のときに編纂された文集八十五巻というのは、兄の二十二歳のときの文集二十巻にくらべると、巻数がたいへんおおい。蕭綱は即興を得意としたぶん、創作の量はおおかつたのだろう。拙著『六朝文評価の研究』第六章を参照。

(13) 蕭綱「答張績謝示集書」への注釈は以下のとおり。

綱少好文章、於今二十五載矣——「綱少<sup>わか</sup>くして文章を好み、今に於いて二十五載なり」と訓じる。この二句は、曹植

「与楊徳祖先書」の「僕少小より文章を為るを好んで、今に至るに迄んで二十有五年なり」をふまえたものだろう。この「今に至るに迄んで二十有五年なり」という一節は、曹植（一九一—二三二）の年齢をいつたものと解せられ、この「与楊徳祖先書」は曹植二十五歳（二二六）のときの作とされている。とすれば、それを模した蕭綱書簡の「今に於いて二十五載なり」も蕭綱の年齢をいつたものと解さねばならない。すると、この「答張纘謝朓集書」は蕭綱二十五歳大通元年（五二七）の作だとみなしてよからう。

日月参辰——ここからは、蕭綱がわかいころに論じた文学論の引用だろう。どこまでが引用なのか判定が困難だが、いちおう「罪在不赦」までとみなしておく。

火龍黼黻——火や龍のかたちをした華麗な模様

玄象——天象（天体の現象）におなじ。この前後は『易』賁卦に由来する、天地を対応させた文学観をなぞっている。こつした発想は六朝ではめずらしいものでなく、『文心雕龍』原道や「文選序」などにもみえる伝統的な考えかたである。

不為丈夫、楊雄実小言破道——揚雄「法言」吾子に「或ひと問いて、吾子少くして賦を好むやと。曰く、然り。童子の雕虫篆刻なり……丈夫は為さざるなり」とある。また「孔子家語」好生に「小弁は義を書し、小言は道を破る」とある。

非謂君子、曹植亦小弁破言——曹植「与楊徳祖先書」に「豈に徒だ翰墨を以て勲績と為し、辞賦を君子と為さんや」とある。また「淮南子」泰族訓に「孔子曰く、小弁は言を破り、小利は義を破る」とある。

車渠・鸚鵡——ともに名だかい酒杯。

三辺——漢のころは匈奴、南越、朝鮮をさしたが、ここでは「建康からみて」辺境の地ぐらゐの意だろう。

久留四載——吳光興『蕭綱蕭繹年譜』はこの「四載」の語を「蕭綱が雍州に駐屯すること四年」と解すれば、史実と一致するとのべている。また「四載」は「四載」とするテキストもある。

沈吟短翰、補綴庸音。寓目写心、因事而作——この部分は、蕭綱「与湘東王書」の「性既好文、時復短詠。雖是庸音、不能閤筆」(つまれつき詩文がすきなもんだから、よく短詩をつくっている。あまりよい出来ではないが、やめられない、の意)によく似ている。

(14) 蕭綱「与蕭臨川書」への注釈は以下のとおり。

零雨送秋——これ以下の四句は、時候の変化を叙したのだが、繊細な季節感によって、すぐれた晩秋の描写となっている。この部分「零雨」のみは、詩「幽風東山に由来した語だが、それ以外は、過去に用例をみぬ六朝の新語によってつづられたものだ。そうした新語の使用によって、いかにも六朝ふうで優美な雰囲気をかもしだしており、蕭綱のすぐれた手腕をおもわせる。

登舟已積——ここからは旅だった蕭子雲のようすを、建康の地から想像してつづったものだろう。あなたが船出してから、日々がつみかかさなつた。つまり時間がすぎた、という意味。

解維金闕——「解維」はともつなをといて、船出する。「金闕」は天子のいます宮闕。ここでは、もちろん梁の京師である建康をさす。

八区内侍、厭直御史之廬——宮廷で宿直などの仕事をするのにあきた、の意。下句の「九棘」云々とのあいだで、「八区」 $\leftrightarrow$ 「九棘」「内侍」 $\leftrightarrow$ 「外府」「御史之廬」 $\leftrightarrow$ 「官曹之務」などと対応させていることに注意。

九棘外府、且息官曹之務——地方にでて、宮仕えからのがれる、の意。「八区」以下の隔句対は、「蕭子雲の地方転出は、貴殿がみずからのそんでのものだろう」といって、左遷ではないことを強調している。

但黒水初旋黒水——ここから蕭綱自身のことを叙している。「但」がその内容的転換を暗示する。なお「黒水」は、ここでは雍州をさす。蕭綱は兄の急死により、雍州刺史(五三三—五三二)から建康の地にかえり、太子としてたつたのである。

未申十千之飲——一斗で一万銭ほどの高価な酒をのんでいない、の意。曹植「名都篇」に「帰り来りて平楽に宴し、

美酒は斗に十千なり」とあるのをふまえる。またあとの「清夜西園」や「弘農書疏、脱還鄴下」でも、曹植に関連した典故をつかっている。これは、この書簡をつづつたときは、蕭統の急逝直後だったので、蕭綱はまだ自分を曹植に比較していたからだろう。もうすこし時間がたつてくると、蕭綱はみずから「曹植でなく」曹丕に擬するようになる。

桂宮既啓——「桂宮」は漢の武帝が長安郊外にたてた宮殿の名だが、のち成帝が太子のころにこの宮にすんだ。するとこの「桂宮」は、太子がすまう宮殿の意でつかつたのだろう。

復乖双闕之宴——「未申十千之飲」と対するので、なにか典拠があるかもしれないが未詳。

文雅縦横——文雅なつどいが盛大におこなわれていること。劉楨「贈五官中郎將詩」に「君侯（曹丕）は壮思多く、文雅縦横たり」とあるのを意識しているよう。

清夜西園——曹植「公宴詩」に「清夜に西園に遊び、蓋を飛ばして相追隨す」をふまえる。この詩は、西園で兄の曹丕が宴席をひらいたとき、弟の植が即興的につくつたもの。この前後、蕭綱は、曹兄弟の文雅なつどいに関連した典故をたくさん利用している。

弘農書疏、脱還鄴下——「弘農」は後漢末の楊修のこと。曹植が鄴にいたころ、配下の楊脩はしばしば書簡をおくつた故事をふまえる。

河南口占、儻歸鄉里——「河南」は河南太守となつた前漢の陳遵のこと。陳遵は赴任した河南の地で、おおくの書簡を口述してかきとらせ、長安の知人におくつたという（『漢書』遊俠伝）。

必遲青泥之封——「遲」はまつ、の意。「あなたのご返事をお待ちしています」は、書簡末尾の常套的短句である。

且觀朱明之詩——「觀」は「朱明之詩」を目にするの意。「朱明」（漢郊祀歌）は、ここでは上句の「青泥」と対応させたもので、ふかい意味はなかるつ。

白雲在天——『穆天子伝』に「西王母は天子の為に謡いて曰く、白雲天に在り、山陵自ずから出づ。道路悠遠として、山川之を問つ。将わくば子死する無く、尚わくば能く復た来たらんことを」とあるのを、そのまま使用したもの。

蒼波無極——典拠があるかもしれないが未詳。「蒼波」は上句の「白雲」と対応させているのだろう。

瞻之岐路——「之」は代名詞の「これ」でなく、「於」の意だろう。「岐路を瞻れは」と訓じる。

愛護波潮——「波潮より愛護して」と訓じる。

- (15) 六朝の美文書簡における三段構成については、拙稿「六朝書簡文の書式について 昭明太子十二月啓を中心に」(『中国詩文論叢』第八集一九八九)を参照。

- (16) 蕭綱「答湘東王書」への注釈は以下のとおり。

「答湘東王書」——吳光興『蕭綱蕭繹年譜』は中大通五年(五三三)、蕭綱が太子となって三年目、三十一歳のときの作とする。書簡中に「吾春初臥疾、極成委弊。……第十三日始侍法筵」(私のほうは、春初に病にかかって横臥し、ひどく衰弱しました。……「三月」十三日になって、やっと法筵にはべることができました)とあるのが、その主要な根拠である。くわしくは同書一八八頁を参照。

暮春美景——この句以下の四句は、時候を叙しているが、蕭綱らしいすぐれた叙景である。

沂川可浴——『論語』先進の「暮春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて帰らん」をふまえた表現。

召南寡訟、時綴甘棠之陰——『詩』召南甘棠の詩句にもとづく。周の召公は訴訟がないとき、甘棠の木陰で政務をやすんだという。「綴」は「輟」に通じて、やめるの意だろう。

冀州為政、暫止裘檐之務——「裘檐之務」は任地を巡察する仕事。『後漢書』賈琮伝によると、賈琮が冀州に刺史として赴任したとき、慣例をやぶって馬車の垂れ幕をすべてあげさせ、任地のようすを詳細に観察した。そうした賈琮でも、暫時のあいだ休憩するだろう、の意。

唐景薦大言之賦——唐勒や景差が大言賦を献上する、の意。彼らが大言賦をつくったことは、宋玉「大言賦」のなかに叙せられている。

安太述連環之弁——典拠未詳。「安太」について、『梁簡文帝集校注』は釈道安と竺法汰の二人だとする。疑問がないではないが、いちおうしたがっておく。

致足樂邪——曹丕「与吳質書」の「元瑜の書記は翩翩へんへんとして、致あつむは楽しむに足るなり」とあるのを利用したもの。この句は、兄の「答晉安王書」でも使用されていた。

春初臥疾——中大通五年（五三三）、三十一歳の「春初」に蕭綱は病臥したのだろう。そして三月十三日にようやく回復し、法筵に出席できたのである。

西山白鹿——曹植「飛龍篇」に「晨に太山に遊べば、雲霧よんぷ竒き突とつたり。忽ごととして二童に逢い、顔色鮮好なり。彼の白鹿に乗り、手ずから芝草を翳す」とある。

子預赤丸——『搜神後記』のつぎのような話をふまえる。許永の弟が病氣になった。屏風のうしろの鬼と腹中の鬼とが、「もし名医の李子豫が赤丸の薬をつかすと、やられてしまふぞ」と会話していた。翌日、やってきた李子豫が赤丸の薬を服用させるや、許永の弟の病氣はすっかりなおった。

高臥六安、每思扁鵲之問——「六安」は枕の一種。扁鵲に関する典拠があるかもしれないが未詳。

静然四屋、念絶修都之香——典拠があるかもしれないが未詳。

豈望文殊之来——『維摩經』の、維摩が病氣になったとき、文殊菩薩が見舞いにいったという話をふまえる。

独思吳客之弁——枚乘「七発」に、楚の太子が病氣になったとき、吳客が七事をかたって、太子の病をいやしたという話をふまえる。

鳴銀鼓於宝坊——この句以降、仏教語を多用して仏法のありがたさを強調している。

白黒——俗人と僧侶。俗人は白衣を身につけ、僧侶は黒衣を着るから。

楊僕有関外之傷——『漢書』武帝紀元鼎三年冬の条の応劭注に、「時に楼船將軍楊僕はら数しばしば大功有り。関外の民と為るを恥ず」とある。

周南起留滞之恨——『史記』太史公自序にある司馬談の話をふまえる。漢武帝が封禪の儀をおこなったとき、太史公の司馬談は周南の地にとどまって、これに参加できなかった。これを無念におもった談は、憤りを発して瀕死の状態となった。

第十三日始侍法筵——吳興同書は三月十三日のこととする。「春初」以来ずっと病臥していた蕭綱は、この日によやぐ回復して法筵に参加できたのだという。

君長近還——未詳。テキストにみだれがあるか。

敬祖前邁——未詳。テキストにみだれがあるか。

江之遠矣——『詩』周南漢広に「江は之れ永<sup>なが</sup>く、方すべからず」とあるのにもとづくか。

寤寐相思——『詩』周南閔睢に「之を求めて得ず、寤寐<sup>ごみ</sup>に思服す」とあるのにもとづくか。

(17) 蕭統「二与何胤書一」への注釈は以下のとおり。

園公道勝、漢盈屈節——園公とは前漢の東園公のこと。『史記』留侯世家によると、秦末、乱世をさけて商山に隠棲した四人の隠者（四皓）のひとつ。漢盈こと漢の恵帝の徳をしたらって下山し、漢廷にあらわれたという。

春卿経明、漢莊北面——春卿とは後漢の桓榮、あざなは春卿のこと。『後漢書』桓榮伝によると、彼は経学にあかるく、

漢莊こと後漢の明帝（劉莊）におもんじられたという。なお、漢恵帝と後漢明帝の故事は、ふたりとも皇太子（蕭統も皇太子）のときの話であることに注意。

夢姑胥而鬱陶——「姑胥」は、何胤がすむ吳県にある山の名。「鬱陶」は鬱々とすること。『尚書』五子之歌にもとづく。

想具区而杼軸——「具区」は、何胤がすむ吳県にある湖の名。「杼軸」の語は『詩』小雅大東に由来するが、ここでは「あれこれ苦心する」の意でつかっているようだ。この語の多様な意味については、拙稿「六朝の文学用語に関する一考察 杼軸をめぐる」、『中京大学文学部紀要』第五二二号（二〇一七）参照。

心往形留——陸機「文賦」の「及其六情底滞、志往神留」（感情のはたらきが停滞し、意欲はあっても精神が活動しなくなる）、の意）にもとつき、すこし字句をいれかえたもの。

撰養得宜——「答晋安王書」にも使用されていた常套の句。「撰養」は身体を大切に於て養生すること。

芻豢——獸の肉。「孟子」告子上に「故に義理の我が心を悦ばすは、猶お芻豢の我が口を悦ばすがごとし」とある。

差得従容——「差従容たるを得たり」と解した。

熱疾憤其神——熱病が精神を混乱させる、の意。

風眩弊其体——「風眩」はてんかん、もしくはめまい。ここではめまいと解した。

蒙求之懷——何胤に教えを請いたいという思い。「蒙求」の語は、『易』蒙卦の「我童蒙を求むるに匪す。童蒙我に求む」にもとづく。

尽意——考えをかきつくす。『易』繫辭上に「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」とある。

(18) 蕭綱「答新渝侯和詩書」への注釈は以下のとおり。

風雲吐於行間——自分（蕭綱）の艶詩に唱和した蕭暎の詩を称賛した句。ここでの「風雲」は、たとえば夏侯湛「抵疑」に「咳唾珠玉と成り、袂を揮えば風雲を出だす」とあるように、すばらしい詩句の意でつかっているのだから。

珠玉生於字裏——「この「珠玉」は、「詩句の」うつくしさの暗喩だろう。

跨躡・含超——ともに「……よりすぐれる」の意。

双鬢向光——この句から「還将画等」句までの三聯は、蕭暎の和詩の雰困気を蕭綱なりに再現したものだろう。この三聯は、それじたいが艶詩を連想させるほど艶麗である。

高楼懷怨、結眉表色——曹植「七哀詩」の「明月は高楼を照らし、流光は正に徘徊す。上に愁思の婦有り、悲嘆して余哀あり」に依拠しつつ、蕭綱なりにアレンジした表現だろう。この「高楼懷怨」句をふくむ隔句対は、怨女をえがいたものなので、蕭暎の和詩「や蕭綱のもの詩」も、おそらく怨女の愁いを叙した作だったのだろう。

長門下泣、破粉成痕——司馬相如「長門賦序」の「孝武皇帝の陳皇后は時に幸せらるるを得たるも、頗る妒なり。別に長門宮に在らしめられ、愁悶し悲思す」に依拠しつつ、蕭綱なりにアレンジした表現だろう。

影裏細腰、令与真類——『漢書』李夫人伝のつぎのような話をふまえる。漢武帝の愛した、李夫人という女性が死んだ。そこで「上は李夫人を思念して已まず。方士の齊人の少翁、能く其の神を致すと云う。乃ち夜に燈燭を張り、帷帳を設け、酒肉を陳ね、而して上をして他帳に居らしむ。好女の李夫人の如き貌、幄坐に還りて歩むを遙かに望ましむ」。鏡中好面、還將画等——おなじく『漢書』李夫人伝の話をふまえる。「李夫人少くして蚤に卒す。上は憐閔し、其の形を甘泉宮に図画せしむ」。

吹簫入秦、方識来鳳之巧——『列仙伝』のつぎのような話をふまえる。「蕭史は秦の穆公の時の人なり。善く簫を吹く。穆公其の女の弄玉を以て之に妻す。日び弄玉に教えて鳳鳴を作さしむ。居ること数年、鳳凰来たりて其の屋に止む。後皆に鳳凰に隨いて飛び去れり」。

鳴瑟向趙、始觀駐雲之曲——漢高祖の愛妾だった戚夫人に関する、二つの話をふまえる。いずれも出典は『西京雜記』卷上。「戚」夫人は善く翹袖、折腰の舞を為し、出塞、入塞、望歸の曲を歌う。侍婢数百人も、皆な之を習う。後宮首を斉えて高唱するや、声は雲霄に入れり。「戚夫人、高帝に侍る。常に趙王如意を以て言を為す。而れども高祖は之を思うや、幾ど半日も言わず。嘆息悽愴して未だ其の術を知らず。輒ち夫人をして筑を撃たしめ、高祖は大風の詩を歌いて以て之に和す」。

喜荷交并也——「荷」は「恩顧をこつむったことへの」感激の意、喜びと感激とが、こもこもおしよせてくる、の意。

## 【追記】

本稿を校了する間ぎわ、蕭統に関するニュースに接した。それは、南京で蕭統こと昭明太子の墓が発見された、という報道である（「朝日新聞デジタル」二〇一八年二月十七日12時6分の配信）。同ニュースによれば、二〇一三年に南京市北東部で獅子冲南朝大墓という古墓が発見されていたが、墓の内部を調査した結果、そのうちの一号墓が昭明太子の墓、二号墓がその母（丁貴實）の墓である可能性がたかくなった、ということであった。

この南京獅子冲南朝大墓については、じつはこの報道以前から、関係者のあいだで注目されていた。そして建康（いまの南京）に都をおいていた南朝のどれかの帝陵だろう、というところまで推定されていたのである。ただ、具体的にだれの陵墓なのかという点で意見がわかれ、宋の文帝をほつむった長寧陵だろうとか、陳の文帝の永寧陵だろうとか、各様の議論がおこなわれていたのだった。

だが、一号墓から「中大通式年」（五三〇）の銘がぎざまれた磚（れんが）が、二号墓から「普通七年」（五二六）の銘がぎざまれた磚が、それぞれみつかったことから、どうやら梁の昭明太子（五三二年の没）とその母（五二六年の没）の陵墓だと断じてまちがいない、ということになったのだろう（こうした経緯を叙してくれたものに、藤井康隆「南京獅子冲南朝陵墓発掘調査」「早期中国史研究」第七巻第一期 二〇一五年六月刊 という報告がある）。そこでおそまきながら、今回のニュース発表表となったのだとおもわれる。

この南朝大墓、一号墓の壁には「竹林七賢図」と「羽人戯虎図」がえがかれているという。ただ、盗掘されているため、その他の文物の出土は、今後も期待できそうにないようだ。もし墓中から、昭明太子の文集、さらに彼が編纂したという陶淵明集や文選が発掘されていれば、どんな大ニュースになったことかと残念でならない。先秦や漢代の歴史や思想の研究は、新出土した文物や簡牘によっていつきに活性化し、すっかり様変わりしてしまった。今回の獅子冲南朝大墓の発見は、六朝においても、同種の新資料発見の可能性を示唆するものである。将来に期待したい。